

# 長谷山際遺跡 鶴ヶ池遺跡 大久保遺跡 ハカノ下遺跡

東九州自動車道（佐伯～県境間）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

2015

大分県教育庁埋蔵文化財センター

# 序 文

本書は、大分県教育委員会が国土交通省九州地方整備局佐伯河川国道事務所の依頼を受けて実施した、東九州自動車道（佐伯～県境間）建設事業に伴う鶴ヶ池遺跡をはじめとした遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する佐伯市は、大分県の最南端にあたります。旧佐伯市や佐伯市蒲江の各浦は、小河川に開析された谷状の平坦地と海岸部の平坦地、それを囲む丘陵・山塊から形成されており、これらの場所に集落を営み、その背後に墓地を設けていました。鶴ヶ池遺跡をはじめとした近世墓地や石塔群の調査において、これまで空白地であった大分県南部の墓地景観に関する貴重な成果が得られました。

本書が埋蔵文化財の保護・啓発とともに、学術研究の一助として広く活用されれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査の実施にあたり多大な御支援・御協力をいただいた関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月 27 日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 松 村 洋 一

# 例言

- 1 本書は大分県佐伯市長谷岸河内鶴ヶ池に所在する鶴ヶ池遺跡をはじめとした4遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、東九州自動車道（佐伯～県境間）建設事業に伴い、国土交通省九州地方整備局佐伯河川国道事務所の委託を受けて、大分県教育庁埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 長谷山際遺跡の発掘調査は平成22（2010）年度、鶴ヶ池遺跡の発掘調査は平成19（2007）・21（2009）年度、大久保遺跡の発掘調査は平成19（2007）年度、ハカノ下遺跡の発掘調査は平成21（2009）・22（2010）年度に、整理等作業は平成24（2012）年度に実施し、長谷山際遺跡を越智淳平が、鶴ヶ池遺跡および大久保遺跡を原田昭一・越智順平が、ハカノ下遺跡を越智淳平がそれぞれ主に担当した。
- 4 現地での写真撮影・遺構実測は、調査担当者が行った。
- 5 遺物実測・トレースに伴う諸作業については、調査員・大分県教育庁埋蔵文化財センター職員のほか、（株）九州文化財総合研究所に委託した。
- 6 出土遺物ならびに写真・図面等は大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田字ビワノ門1977）において、保管している。
- 7 本書で使用する方位はいずれも磁北である。また、標高は、T.P.を使用した。
- 8 本書の執筆・編集は、小柳和宏・原山昭一・越智順平が担当した。

# 目次

第1章 調査の経過	1
第1節 調査の経過	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 長谷山際遺跡	5
第4章 近世墓地の調査	7
第1節 鶴ヶ池遺跡	7
第2節 大久保遺跡	11
第3節 ハカノ下遺跡	13
第4節 墓碑	17
第5節 小結	63
第5章 まとめ	64

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の歴史的環境	4
第2図	長谷山際遺跡石塔群①	5
第3図	長谷山際遺跡石塔群②	6
第4図	鶴ヶ池遺跡位置図	7
第5図	鶴ヶ池遺跡平面図	9・10
第6図	大久保遺跡位置図	11
第7図	大久保遺跡平面図	12
第8図	ハカノ下遺跡位置図	13
第9図	ハカノ下遺跡平面図	15・16
第10図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑①	26
第11図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑②	27
第12図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑③	28
第13図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑④	29
第14図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑤	30
第15図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑥	31
第16図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑦	32
第17図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑧	33
第18図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑨	34
第19図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑩	35
第20図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑪	36
第21図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑫	37
第22図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑬	38
第23図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑭	39
第24図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑮	40
第25図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑯	41
第26図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑰	42
第27図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑱	43
第28図	鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑲	44
第29図	大久保遺跡近世墓碑①	47
第30図	大久保遺跡近世墓碑②	48
第31図	大久保遺跡近世墓碑③	49
第32図	大久保遺跡近世墓碑④	50
第33図	大久保遺跡近世墓碑⑤	51
第34図	大久保遺跡近世墓碑⑥	52
第35図	ハカノ下遺跡近世墓碑①	56
第36図	ハカノ下遺跡近世墓碑②	57
第37図	ハカノ下遺跡近世墓碑③	58
第38図	ハカノ下遺跡近世墓碑④	59
第39図	ハカノ下遺跡近世墓碑⑤	60
第40図	ハカノ下遺跡近世墓碑⑥	61
第41図	ハカノ下遺跡近世墓碑⑦	62

## 表 目 次

第1表	鶴ヶ池遺跡墓碑一覽①	17
第2表	鶴ヶ池遺跡墓碑一覽②	18
第3表	鶴ヶ池遺跡墓碑一覽③	19
第4表	鶴ヶ池遺跡墓碑一覽④	20
第5表	鶴ヶ池遺跡墓碑一覽⑤	21
第6表	鶴ヶ池遺跡墓碑一覽⑥	22
第7表	鶴ヶ池遺跡墓碑一覽⑦	23
第8表	鶴ヶ池遺跡墓碑一覽⑧	24
第9表	鶴ヶ池遺跡墓碑一覽⑨	25
第10表	大久保遺跡墓碑一覽①	45
第11表	大久保遺跡墓碑一覽②	46
第12表	ハカノ下遺跡墓碑一覽①	53
第13表	ハカノ下遺跡墓碑一覽②	54
第14表	ハカノ下遺跡墓碑一覽③	55

## 写真図版目次

写真図版1	(長谷山際遺跡)	67
写真図版2	(鶴ヶ池遺跡)	68
写真図版3	(鶴ヶ池遺跡)	69
写真図版4	(鶴ヶ池遺跡)	70
写真図版5	(鶴ヶ池遺跡)	71
写真図版6	(鶴ヶ池遺跡)	72
写真図版7	(鶴ヶ池遺跡)	73
写真図版8	(鶴ヶ池遺跡)	74
写真図版9	(鶴ヶ池遺跡)	75
写真図版10	(鶴ヶ池遺跡)	76
写真図版11	(鶴ヶ池遺跡)	77
写真図版12	(鶴ヶ池遺跡)	78
写真図版13	(鶴ヶ池遺跡)	79
写真図版14	(鶴ヶ池遺跡)	80
写真図版15	(鶴ヶ池遺跡)	81
写真図版16	(大久保遺跡)	82
写真図版17	(大久保遺跡)	83
写真図版18	(大久保遺跡)	84
写真図版19	(大久保遺跡)	85
写真図版20	(ハカノ下遺跡)	86
写真図版21	(ハカノ下遺跡)	87
写真図版22	(ハカノ下遺跡)	88
写真図版23	(ハカノ下遺跡)	89

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査の経過

東九州自動車道は、福岡県北九州市を起点として、大分・宮崎両県を経て、鹿児島県鹿児島市にいたる九州東部を縦断する自動車専用的高速道路である。本路線は、高速交通体系の整備が遅れている東九州地区において都市間の移動時間の短縮及び産業や観光等の活性化を目的としている。その中で、「蒲江IC～北川IC間」が第1回国土開発幹線自動車道建設会議（平成15年12月）において、「佐伯IC～蒲江IC」が同第2回会議（平成18年2月）にて国と地方の負担による新直轄方式の整備区間として選定されたところである。そこで、国土交通省九州地方整備局佐伯河川国道事務所により、佐伯ICから蒲江ICを経て大分県境にいたる約30kmの区間において、工事が実施されることとなった。

一方で、東九州自動車道（佐伯～県境間）の建設事業の対象となった区間には、梅牟礼遺跡や森の木遺跡やシシ垣の所在が確認されている地域であった。そこで、大分県教育委員会では、対象区域の遺跡の保存措置が必要と判断し、日本道路公団九州支社大分工事事務所と協議を開始した。平成12（2000）年に路線内の遺跡分布調査を実施した。その後、平成15年12月に新直轄方式となったため、国土交通省九州地方整備局佐伯河川国道事務所の依頼を受け、平成20年1～3月および平成22年2月に鶴ヶ池遺跡、平成20年1～3月に大久保遺跡、平成21年8月～平成22年10月にハカノ下遺跡、平成23年2月に長谷山際遺跡の本調査をそれぞれ行った。

## 第2節 発掘作業の経過

長谷山際遺跡・鶴ヶ池遺跡・大久保遺跡・ハカノ下遺跡の発掘調査は、下記のとおり実施した。以下、調査組織等について記す。

遺跡名：長谷山際遺跡

所在地：佐伯市長谷山際

調査期間：平成23年2月8日～平成23年2月9日

調査面積：約15㎡

事業主体：国土交通省九州地方整備局佐伯河川国道事務所

調査主体：大分県教育委員会

調査組織（役職は当時）

平成22年度

埋蔵文化財センター	所長	山口博文
-----------	----	------

◇	受託事業班主幹（総括）	小柳和宏
---	-------------	------

◇	受託事業班主幹	原田昭一
---	---------	------

◇	受託事業班主事	越智淳平
---	---------	------

遺跡名：鶴ヶ池遺跡

所在地：佐伯市長谷岸河内鶴ヶ池

調査期間：平成20年1月28日～3月19日、平成22年2月24日

調査面積：約500㎡

事業主体：国土交通省九州地方整備局佐伯河川国道事務所

調査主体：大分県教育委員会

調査組織（役職は当時）

平成19年度

埋蔵文化財センター	所長	福田快次
-----------	----	------

◇	調査第二課課長	栗田勝弘
---	---------	------

◇	調査第二課受託事業担当主幹	原山昭一
---	---------------	------

埋蔵文化財センター	調査第二課受託事業担当主事	越智淳平
平成21年度		
埋蔵文化財センター	所長	佐藤英一
◇	受託事業班主幹(総括)	小柳和宏
◇	受託事業班主幹	原田昭一
◇	受託事業班主事	越智淳平

遺跡名：大久保遺跡

所在地：佐伯市青山市福所大久保  
 調査期間：平成20年1月28日～3月10日  
 調査面積：約400㎡  
 事業主体：国土交通省九州地方整備局佐伯河川国道事務所  
 調査主体：大分県教育委員会  
 調査組織(役職は当時)  
 平成19年度

埋蔵文化財センター	所長	福田快次
◇	調査第二課課長	栗田勝弘
◇	調査第二課受託事業担当主幹	原田昭一
◇	調査第二課受託事業担当主事	越智淳平

遺跡名：ハカノ下遺跡

所在地：佐伯市蒲江野々河内ハカノ下  
 調査期間：平成21年8月17日～平成22年3月12日、  
 平成22年4月27日～平成23年3月17日  
 調査面積：約1,000㎡  
 事業主体：国土交通省九州地方整備局佐伯河川国道事務所  
 調査主体：大分県教育委員会  
 調査組織(役職は当時)

埋蔵文化財センター	所長	佐藤英一
◇	受託事業班主幹(総括)	小柳和宏
◇	受託事業班主事	越智淳平
平成22年度		
埋蔵文化財センター	所長	山口博文
◇	受託事業班主幹(総括)	小柳和宏
◇	受託事業班主事	越智淳平

### 第3節 整理作業の経過

整理作業は、平成24年度に実施した。以下、調査組織等について記す。

事業主体：国土交通省九州地方整備局佐伯河川国道事務所  
 調査主体：大分県教育委員会  
 調査組織(役職は当時)

埋蔵文化財センター	所長	山口博文
◇	受託事業班課長補佐(総括)	小柳和宏
◇	受託事業班主幹	友岡信彦

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

九州の東部に位置する大分県は、山がちで山地に規制され小平野ごとに地域性を有する特徴的な地理的環境下にある。その中で、県南地域は対岸の愛媛県南予地方と同様に複雑な海岸線を有するリアス式海岸と山がちな地形から成る。

佐伯市は、大分県の最南にあたり、旧佐伯市の平野部および佐伯市蒲江の各浦は、小河川に開析された谷状の平坦地と海岸部の平坦地、それを囲む丘陵・山塊から形成されている。長谷山際遺跡・鶴ヶ池遺跡や大久保遺跡は佐伯湾に注ぐ堅田川の支流である大越川流域の谷平野を望む丘陵裾部に所在する遺跡であり、ハカノ下遺跡は猪串湾を臨む小平野に流れる野々河内川流域の谷平野を望む丘陵裾部に所在する遺跡である。これらの前面には近世以降の集落が存在し、このような場所が近世墓地として占められたことがわかる。

### 第2節 歴史的環境

佐伯市では、確認されている遺跡は比較的少なく、番匠川流域に集中している。

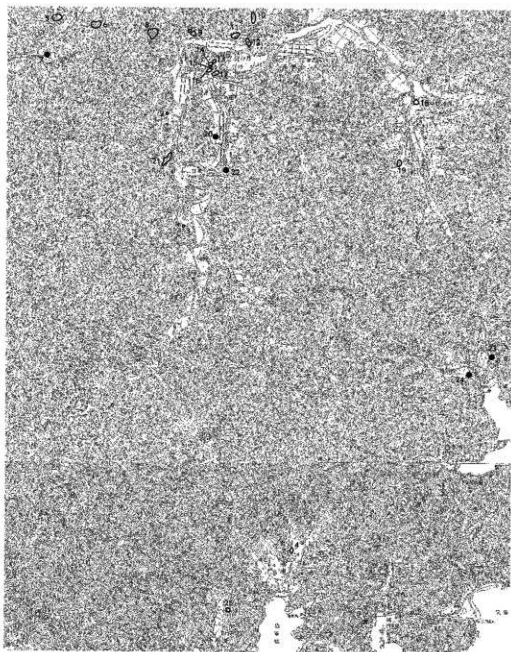
今回、調査対象とした箇所周辺には、旧石器時代の遺跡は確認されておらず、縄文時代の遺物としては、わずかに下城遺跡や長良貝塚等が大越川や堅田川を見下ろす丘陵裾部に所在し、これらの遺跡からは縄文早期の押型土器が出ている。また、内陸部では大越川左岸の河岸段丘上にある森の木遺跡では、縄文時代早期～前期の集落跡が調査され、アカホヤ火山灰層の上層において焼土坑や集石遺構が確認されている。また、弥生時代の遺跡としては、長良貝塚において弥生時代中期の遺物が出土している。

古墳時代から古代にかけてまとまった遺跡の存在は確認されておらず、蒲江竹ノ浦河内から須恵器の甕や石棺、楠本浦からも石棺が発見したと伝えられているが詳細は不明である。奈良～平安時代の律令制下では、海部郡穂積郷に属したと考えられるが当該期の遺跡は確認されていない。おそらく、海を生業としながら扇状地や微高地上で生活していたものと考えられる。

中世に至っても、同様であり、わずかに森の木遺跡において、中世～近世の掘立柱建物跡・欄列跡が確認されているのみである。しかし周辺には堤内宝篋印塔・石打石幢をはじめとした石塔群や高城跡・宇山城跡をはじめとした城跡が存在するため、確実に人々の生活の営みは存在していたことがわかる。

中世では、応安4年(1371)に今川義範が日向の土持時榮にあてた軍勢督促状の中に「蒲江」と記されており、この頃、蒲江は佐伯氏の支配下に置かれ、各浦には五輪塔などの石造物が確認されていることから、南北朝時代～戦国時代を前後して現在の集落景観が徐々に形成されていったものと考えられる。近世に入ると、毛利高政が日田の隈より佐伯に侵入し、蒲江を含め佐伯市一帯が佐伯藩領となっている。蒲江丸市尾浦に存在する小河内遺跡や菅ヶ谷遺跡では、近世以降、現在に至るまで石や土などで可耕地のまわりに垣を築き、害獣の進入を防ぐ「シシガキ」が確認でき、耕作地に乏しい佐伯市周辺の平野部の村人が、いかに生活の糧を得るのに苦勞したかがわかる。





第1図 遺跡の位置と周辺の歴史的環境 (国土地理院 1/100,000 「佐伯」・「蒲江」)

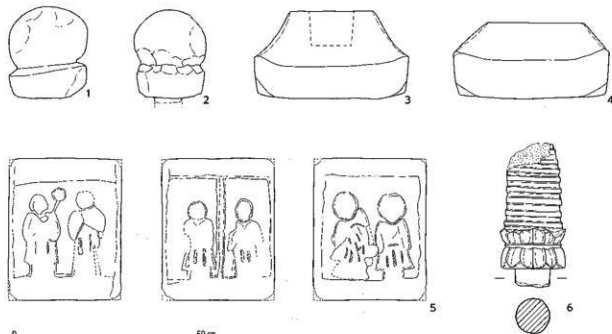
- 1 長谷山際遺跡 2 鶴ヶ池遺跡 3 大久保遺跡 4 ハカノ下遺跡 5 竹田城跡 6 平城跡 7 提内宝篋印塔  
 8 高城跡 9 元越遺跡 10 中山砦跡 11 下城遺跡 12 八幡山城跡 13 長良貝塚 14 上ノ台館跡 15 上ノ台遺跡  
 16 汐月遺跡 17 宇山城跡 18 木立遺跡 19 長野遺跡 20 西野庚申塔 21 森の木遺跡 22 石打石幢  
 23 清水庵五輪塔群 24 黒木家石殿 25 小河内遺跡

### 第3章 長谷山際遺跡

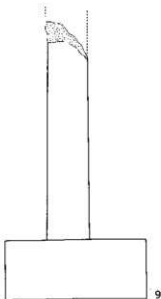
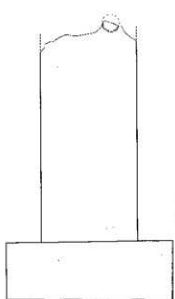
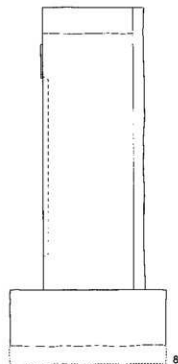
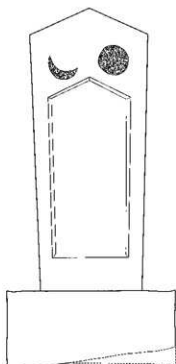
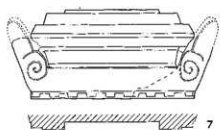
元越集落背後の山の中腹に路線にかかる近世墓地があり、その中に中世から近世前期に遡る石塔の部材が積み上げられている。原位置を保っていないと思われるため、下部の調査は行わず、石塔の実測調査のみを行った。石塔状に積みまれているのは、一番下から4の五輪塔の火輪、5の四角柱の三面に地藏像(?)を浅く浮き彫りにした塔身部、7の宝篋印塔の笠、3の五輪塔の火輪、6の相輪(九輪の中段から上部を欠)である。さらに周囲には1と2の五輪塔空風輪が置かれていた。最も古いものは、6の相輪で、花卉のシャープさから南北朝期まで遡るとされる。五輪塔の火輪(3、4)は室町から戦国、同空風輪(1、2)は戦国期である。5の塔身は石幢龕部と思われるが、浅い彫りで像容が不明瞭なことから戦国期以降のものである。7の宝篋印塔は、垂木を表現するなど大分県の南部の宝篋印塔の特徴を有するが、隅飾り突起が小さく、外方向に大きく開くことから、近世前期まで下るものである。

また、東西に離れた元越集落の間をつなぐ道沿いに、4基の庚申塔を祭っている。最も古いもので文政2年(1819)、次ぎに文久2年(1862)、次ぎに明治14年(1881)、最も新しいもので明治41年(1908)である。8は文久2年のもので、上部に日月を浮き彫りにして赤彩している。板碑型をしている。9は上部を欠くが、8と同様に日の浮き彫りが認められる。

元越の集落の一部を発掘調査しているが(元越遺跡)、そこからは16世紀代の掘立柱建物が検出されている。調査箇所が集落の端の一部であったことから、集落そのものの起源に迫ることは出来ていないが、集落背後の墓地に南北朝期に遡る石塔が存在したことは、集落の起源も南北朝期まで遡る可能性を示していると言えるであろう。



第2図 長谷山際遺跡石塔群①(1/10)

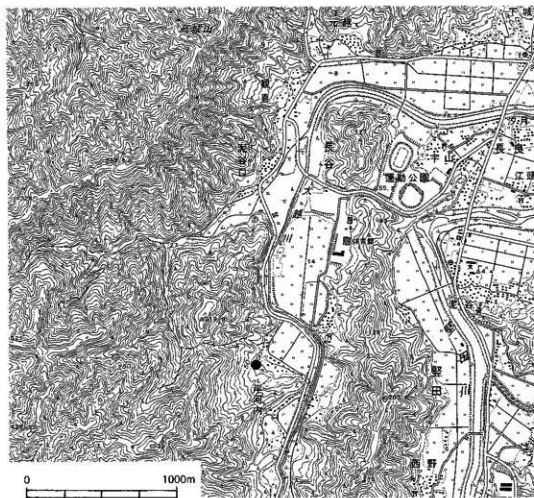


第3圖 長谷山際遺跡石塔群② (1/10)

## 第4章 近世墓地の調査

### 第1節 鶴ヶ池遺跡

鶴ヶ池遺跡は佐伯市長谷岸河内鶴ヶ池に所在する。調査対象地は堅田川の支流である大越川流域の状平野を望む丘陵の裾部の集落背後の丘陵緩斜面に位置し、今回の調査では、近世墓地の実測図作成・拓本採取および測量等を行った。近世墓地に関しては、個人が管理し、また、東九州道建設に伴う移転により、管理者による改葬が行われるため、墓地の上部構造の調査のみを行った。

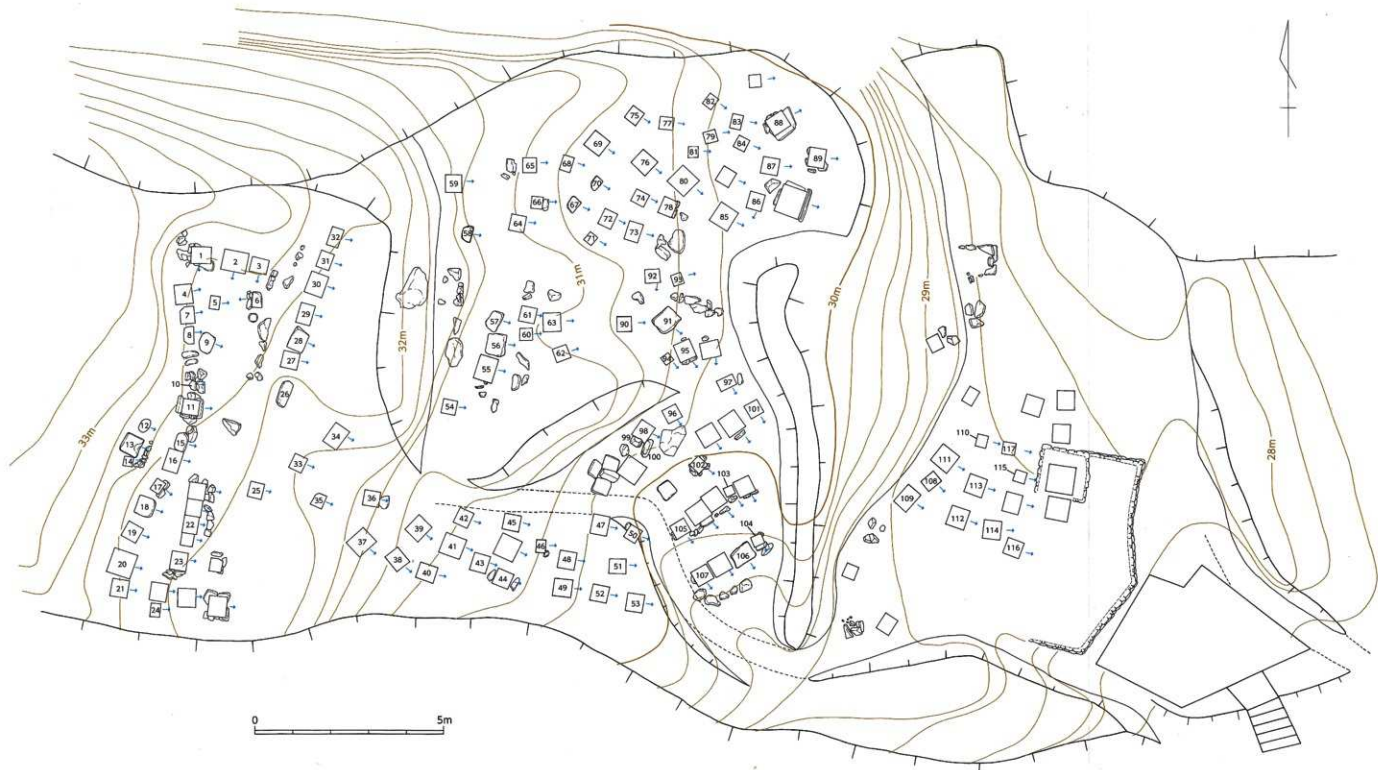


第4図 鶴ヶ池遺跡位置図(国土地理院 1/25,000「植松」)

集落背後の標高28～33mに位置する500m程度の緩斜面に5か所の平坦地を造成して、墓碑を造立している。近世墓地に最も古い紀年銘が残るものとして、貞享元年(1684)銘をもつ近世墓(第5図15)、貞享2年(1685)銘をもつ近世墓(第5図7)などが最上段最奥部に並べられているため、この墓地は17世紀後葉に上段から形成されていったことが想定できる。次いで、18世紀前葉に最上段の前面に新たに造立されていることがわかる(第5図25～36)。18世紀後葉には、1段下の参道をはさみ南側の空間に順次造立されており(第5図37～39、44・45)、また、参道をはさみ北側の空間にも18世紀をとおして墓碑が造立されていることがわかるが、基本的に奥から前面に向かい新しくなっていることがわかる(第5図54～61、64・65・72・74・76・77・80・83・85・90・91・93)。このように上半部の空間に古式の墓碑が存在することが観察できるが、これらの墓碑の空間を埋める形で19世紀の墓碑が立てられ、それが明治期まで続いていることがわかる。さらに下の段には第5図96～

101のように、18世紀後葉に墓碑の造立が始まり、ここにおいても19世紀の墓碑が立てられ、それが明治期まで続いている。最下段の空間は、近年の墓地整理のため、墓碑が集積されている箇所があり、本来の墓地景観を保っていない。ただ、集積されている墓碑中に享保3年（1718）銘や享保13年（1728）銘がみられるものがあり、18世紀前葉から営まれた空間であったことがわかり、ここにおいても、それ以降、明治期にいたるまで順次、造営され続けていることがわかる。

墓碑は近世に遡るもののみ実測図作成・拓本採取を行い、それは第10～28図に示し、概要は第1～9表に示した。



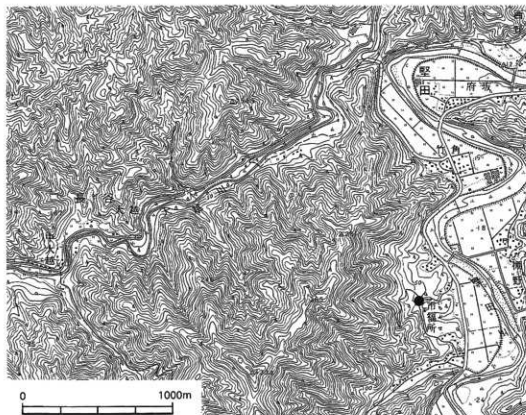
第5図 輪ヶ池遺跡平面図 (1/100)

## 第2節 大久保遺跡

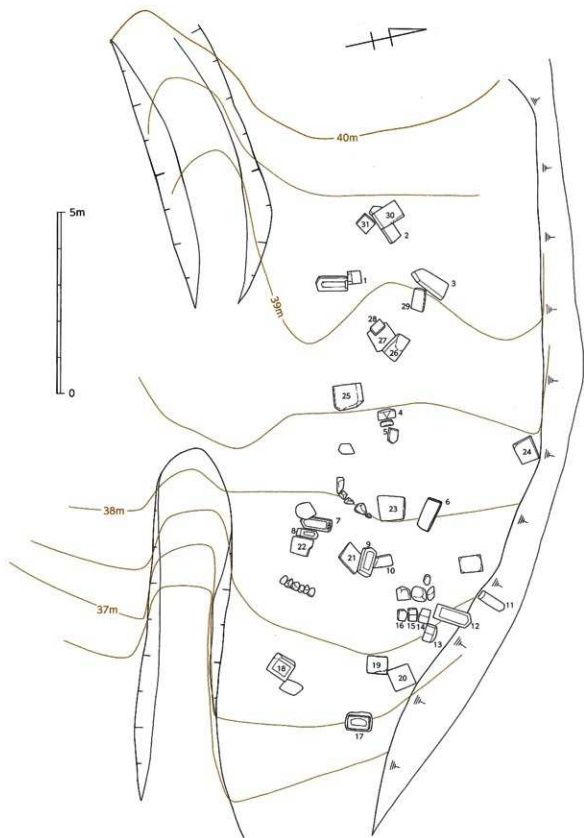
大久保遺跡は佐伯市青山市福所大久保に所在する。調査対象地は堅田川流域の狭隘な谷状平野を望む丘陵の裾部の集落背後の丘陵緩斜面に位置し、今回の調査では、近世墓地の実測図作成・拓本採取および測量等を行った。近世墓地に関しては、個人が管理し、また、東九州道建設に伴う移転により、管理者による改葬が行われるため、墓地の上部構造の調査のみを行った。

集落背後の標高36～40mに位置する200㎡程度の緩斜面に墓碑を造立している。近世墓地に最も古い紀年銘が残るものとして、延宝8年(1680)銘をもつ近世墓(第7図2)をはじめ、第7図1～4が最上部に存在し、また、最も新しい紀年銘をもつものは享保10年(1725)であり(第7図13)、これをはじめ、18世紀前葉のものが下半に多いため、この墓地は17世紀後葉に上部から形成されていったことが想定できる。墓碑にみえる紀年銘の期間が、50年に満たない短期であるため、家の断絶や墓地の移転等が起因していることが想定できる。ただ、現在の管理者がこの墓地の管理を放棄する祭祀として、墓碑を引き倒して景観を破壊してしまったため、徳と基礎の関係がわからなくなってしまった。しかし、型的にみて、17世紀後葉～18世紀前葉にかけての良好な形態をもつ墓地として貴重な成果が得られた。

墓碑は実測図作成・拓本採取を行い、それは第29～34図に示し、概要は第10・11表に示した。



第6図 大久保遺跡位置図(国土地理院 1/25,000「上直見」)



第7図 大久保遺跡平面図 (1/20)

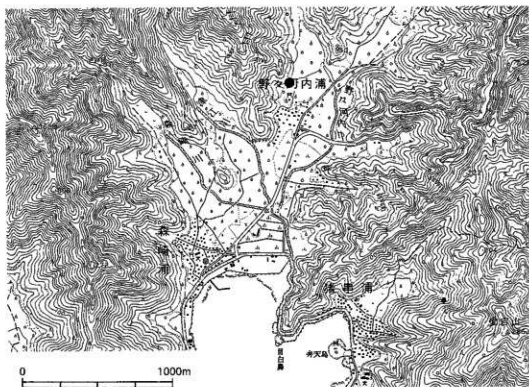


### 第3節 ハカノ下遺跡

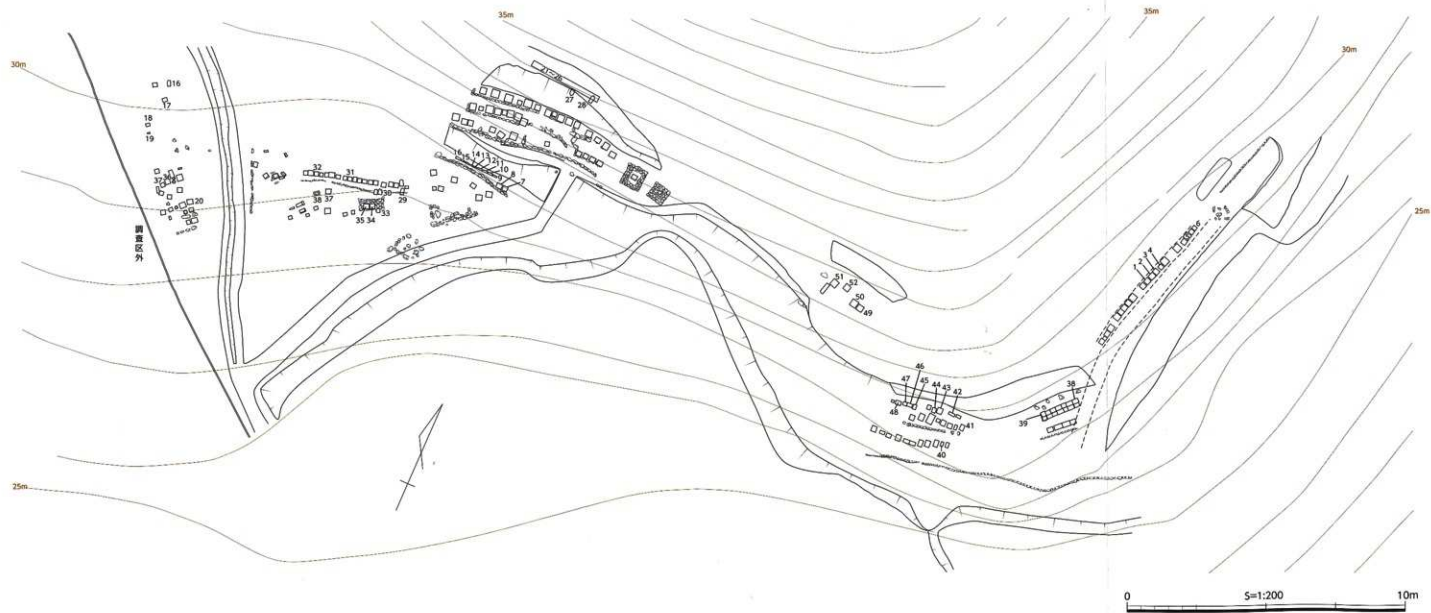
遺跡は佐伯市蒲江野々河内ハカノ下に所在する。調査対象地は野々河内川流域の狭隘な谷状平野を望む急峻な丘陵裾部に位置し、今回の調査では、近世墓地の実測図作成・拓本採取および測量等を行った。近世墓地に関しては、個人が管理し、また、東九州道建設に伴う移転により、管理者による改葬が行われるため、墓地の上部構造の調査のみを行った。

集落背後の標高25～35mに位置する1,000m程度の緩斜面に墓碑を造立している。近世墓地に最も古い紀年銘が残るものとして、延宝3年(1675)銘をもつ近世墓(第37図22、第39図39)が挙げられるが、これらをはじめ1700年代のものは、多くが花崗岩、少数例が砂岩を石材としている。砂岩製墓碑の産出地が明らかでないもの、地元で産出されるものではなく、また、花崗岩については関西地方からの外来の石材であり、墓地の造営が海運により持ち込まれた墓碑により形成され始めたことがわかる。1710年代には花崗岩製の墓碑がみられなくなり、砂岩と凝灰岩の墓碑に限定されてしまうが、時代が下るにつれ、徐々に凝灰岩製墓碑の比率が高くなっていく傾向がある。

墓碑は近世に遡るもののみ実測図作成・拓本採取を行い、それは第35～41図に示し、概要は第12～14表に示した。



第8図 ハカノ下遺跡位置図 (国土地理院 1/25,000「蒲江」)



第9図 ハカノ下遺跡平面図 (1/200)

#### 第4節 墓碑

第1表 鶴ヶ池遺跡墓碑一覧①

番号	図版番号	石材	碑面	銘文	紀年銘	西暦	備考
1	10-1	凝灰岩	正面	文化二升年 香雲淨基信女 三月十二日	文化2年	1805	穂の背面の成形・調整は粗く、ノミ痕が残る。
2	10-2	凝灰岩	左面	享和元酉年九月十一日	享和元年	1801	穂の背面の成形・調整は粗く、ノミ痕が残る。
			正面	淨雲淨基信上位			
			右面	併名 新六行年七十九歳			
3	10-3	凝灰岩					正面の彫り沈め内に墨書が残るが、判読不能。穂の背面・側面にノミ痕を残し、成形が雑でバランスが悪い。
4	10-4	凝灰岩	正面	宝永五年子 雲 歸元実山宗松禪定門位 十二月廿二日	宝永5年	1708	穂の背面にノミ痕が残るが、ノミ痕の上から磨いている。
			左面	宝曆九卯大五月十二日			
5	10-5	凝灰岩	正面	露覚童子	宝曆9年	1759	側面・背面にノミ痕が残る。
			右面	新六子			
6	11-6	凝灰岩					正面の彫り沈め内に墨書・刻書とも認められない。穂の背面は粗調整。成形が雑でバランスが悪い。基礎は自然石。
7	11-7	凝灰岩	正面	貞享二年 版元江藤了春信士 正月十九	貞享2年	1685	成形・調整ともきわめて雑である。穂の側面・背面にノミ痕を残す。基礎は自然石をわずかに加工している。銘文の彫りも浅く雑である。
8	11-8	凝灰岩	正面	早世如一早幼童子			成形・調整とも雑であり、穂の側面・背面にノミ痕を残す。基礎は成形・調整ともきわめて雑である。銘文の彫りも浅く雑である。
9	11-9	凝灰岩	正面	寛延二己年 法名 教真西僧上 二月四日	寛延2年	1749	穂の側面・背面にノミ痕を残す。基礎は自然石をわずかに加工している。銘文の彫りも浅く雑である。
10	11-10	凝灰岩					穂のみ。正面の彫り沈め内に墨書がわずかに残るが、判読不能。穂の背面・側面にノミ痕を残し、成形が雑でバランスが悪い。
11	11-11	凝灰岩					光背をもつ地藏立像の丸彫りであり、基礎に嵌め込まれている。
12	11-12	凝灰岩					光背をもつ地藏立像の丸彫りであり、蓮華座の基礎に嵌め込まれている。
13	11-13	凝灰岩					石殿。コの字状の室内に2点の石造物を納めているが、意味不明。本来の姿かどうかわからない。
14	11-14	凝灰岩	正面	文化十三年丙 三界真露 十一月廿四日	文化13年	1816	光背をもつ地藏立像の丸彫りであり、基礎に嵌め込まれている。基礎正面の彫り沈め内に刻銘がみられる。
15	12-15	凝灰岩	正面	貞享元年 歸元一泡機露童子堂 七月四日	貞享元年	1684	穂の背面・側面後半部は荒削りした状態であり、側面前半部は粗いノミ痕を残す。成形が雑でバランスが悪い。基礎は自然石を荒削りしたものの。銘文の彫りも浅く雑である。
16	12-16	凝灰岩	正面	享保十八丑年 法名釈惠秀僧上 正月七日	享保18年	1733	穂の背面のみ粗調整。基礎は自然石を荒削りしたものの。銘文の彫りも浅く雑である。
17	12-17	凝灰岩	左面	享和三亥天	享和3年	1803	成形・調整とも丁寧であり、背面のみわずかに彫らませ、ノミ痕を残す。
			正面	唯是童子			
			右面	九月三日			
18	12-18	凝灰岩	正面	寛延二年天 □□信女 六月□六日	寛延3年	1750	成形・調整とも雑であり、背面に粗いノミ痕を残す。銘文の彫りも浅く雑である。

※番号は、第5図の墓碑番号と同じ

第2表 鶴ヶ池遺跡墓碑一覧②

番号	図版番号	石材	碑面	銘文	紀年銘	西暦	備考
19	12-19	凝灰岩	左面	天保二年卯年	天保2年	1831	各面の成形・調整は丁事である。背面はやや劣るが磨かれている。銘文の彫りも良く深い。
			正面	法岩妙珠信女 位			
			右面	俗名 六月廿五日おるい			
20	13-20	凝灰岩	左面	天保六年	天保6年	1835	各面の成形・調整は丁事である。背面はやや劣るが磨かれている。銘文の彫りも良く深い。
			正面	空正遺魂願信士			
			右面	未七月朔日 俗名市良右エ門			
21	13-21	凝灰岩	左面	安政六未年	安政6年	1859	各面の成形・調整は丁事である。背面はやや劣るが磨かれている。銘文の彫りも良く深い。
			正面	寒岩良松信士			
			右面	十二月廿一日足出辨藏 足出辨右衛門父			
22	13-22	凝灰岩	左面	文久二戌年 六月三十日	文久2年	1862	穂・基礎とも各面の成形・調整はきわめて丁事である。銘文の彫りも良く深い。
			正面	心相智頼信女			
			右面	俗名 ツル			
23	14-23	凝灰岩	左面	安政五年年 三月十二日	安政5年	1858	穂・基礎とも各面の成形・調整はきわめて丁事である。銘文の彫りも良く深い。正面の銘文が左により、また、左面のみ銘文がみられるのは、夫婦の合葬墓を意図したが、何らかの理由で夫人の刻銘がなされなかったことによるものと考えられる。
			正面	鎌道恒欽信士			
24	14-24	凝灰岩	左面	慶応三卯六月十二日	慶応3年	1867	穂・基礎とも各面の成形・調整は丁事である。穂の背面はわずかに磨らせている。
			正面	其夢室女			
			右面	俗名キム 足田辨右衛門 娘			
25	14-25	凝灰岩	正面	享保十七年壬子歲 全李了白信士 三月初九日	享保17年	1732	上半部欠失。穂の成形・調整ともやや雑である。背面にノミ痕を残す。
26	14-26	凝灰岩	正面	享保十四巳酉天 正源宗覚信士靈位 十月廿日	享保14年	1729	穂のみ。背面にノミ痕を残す。刻銘内に墨を入れている。下部に除刻の蓮華文がみられる。
27	14-27	凝灰岩	正面	享保十乙巳年 兼心宗肝信士 位 十月廿五日	享保10年	1725	背面の調整は粗く、ノミ痕が残る。刻銘内に墨を入れている。下部に除刻の蓮華文がみられる。基礎は自然石を荒削りしたもの。
28	14-28	凝灰岩	正面	享保七壬寅年 藤外宗奉禰定門 靈位 正月初七日	享保7年	1722	背面の調整は粗く、ノミ痕が残る。下部に墨書の特徴がみられるが、蓮華文であろうか。基礎は自然石を荒削りしたもの。
29	14-29	凝灰岩	正面	享保九甲辰年 貞林妙實信女 靈位 七月廿六日	享保9年	1724	穂の調整は丁事でノミ痕が消されている。蓮華文は除刻。基礎にはノミ痕が多く残る。
30	15-30	凝灰岩	正面	享保六丑年 釈 妙博 七月六日	享保6年	1721	穂の調整は比較的丁事が、背面はノミ痕が残る。
31	15-31	凝灰岩	正面	享保七壬寅年 普光童子 靈位 三月十四日	享保7年	1722	穂の背面の調整は粗く、ノミ痕が残る。基礎にはノミ痕が多く残る。
32	15-32	凝灰岩	正面	享保八癸卯年 常休童女 靈位 正月十五日	享保8年	1723	穂の背面の調整は粗く、ノミ痕が残る。基礎にはノミ痕が多く残る。
33	15-33	凝灰岩	正面	元文五申年 春光義壽信士 正月四日	元文5年	1740	穂の背面の調整は粗く、ノミ痕が残る。基礎にはノミ痕が多く残る。
34	15-34	凝灰岩	正面	享保十七壬子年 飯真法心禅信士 靈位 五月廿七日	享保17年	1732	穂の背面の調整は粗く、ノミ痕が残る。基礎にはノミ痕が多く残る。

※番号は、第5図の墓碑番号と同じ

第3表 鶴ヶ池遺跡墓碑一覧③

番号	国版番号	石材	碑面	銘文	紀年銘	西暦	備考
35	15-35	凝灰岩	正面	享保十八丑歲 心 瑞雲妙祥信女 正月廿七日	享保 18 年	1733	徳の背面の調整は粗く、ノミ痕が残る。基礎にはノミ痕が多く残る。
36	16-36	凝灰岩	正面	元文五申天 心 芳心常栄信女 二月初四日	元文 5 年	1740	徳の背面の調整は粗く、ノミ痕が残る。基礎にはノミ痕が多く残る。
37	16-37	凝灰岩	正面	明和三年丙戌年 普賢慈成信女 三月初九日	明和 3 年	1766	徳の調整は丁寧だが、背面のみ粗調整。基礎の調整は丁寧。除刻の蓮華座は縁揃でバランスも悪い。
38	16-38	凝灰岩	左面	安永四乙未天	安永 4 年	1775	各面の成形成・調整は丁寧である。背面は粗いノミ痕を残している。刻銘に墨を入れている。
			正面	來希貞松信女			
39	16-39	凝灰岩	右面	霜月二日	明和 4 年	1767	各面の成形成・調整は丁寧である。背面はノミ痕の上からわずかに磨かれている。基礎は丁寧に仕上げられている。
			正面	明和四亥天 早蓮 智芳童女 二月念五			
40	16-40	凝灰岩	左面	慶應元年十月十七日	慶応 元年	1865	各材ともすべて丁寧に成形成・調整されている。徳の背面はわずかに磨かせる。
			正面	靈壽智明信女			
41	16-41	凝灰岩	左面	明治十二年七月十三日	明治 12 年	1879	各材ともすべて丁寧に成形成・調整されている。徳の背面はわずかに磨かせる。
			正面	一法妙賢信女			
42	17-42	凝灰岩	正面	繁露貞増信女	天保 13 年	1842	各材ともすべて丁寧に成形成・調整されている。徳の背面のみノミ痕を残し、わずかに磨かせる。
			右面	天保十三年 寅正三日			
43	17-43	凝灰岩	左面	文久三年正月十日	文久 3 年	1863	各材ともすべて丁寧に成形成・調整されている。徳の背面はわずかに磨かせる。
			正面	春溪古心僧士			
44	17-44	凝灰岩	左面	寛政六寅	寛政 6 年	1794	徳・基礎とも各面の成形成・調整は丁寧である。徳の背面はわずかに磨かせている。
			正面	即心是空僧士			
45	17-45	凝灰岩	右面	四月二日	寛政 4 年	1792	徳・基礎とも各面の成形成・調整は丁寧である。徳の背面はわずかに磨かせている。
			左面	寛政四子年			
46	17-46	凝灰岩	正面	實外妙相信女	弘化 2 年	1845	丸彫りの地藏坐像の基礎2段目方柱石正面に刻銘が見られる。基礎2段目の背面は丸く仕上げられている。
			右面	十月十日			
47	17-47	凝灰岩	正面	弘化二巳年 恵門重女 五月九日おさだ	文化 2 年	1805	徳・基礎とも各面の成形成・調整は丁寧である。徳の背面は磨きはやや粗く、わずかに磨かせている。
			左面	文化二丑年			
48	17-48	凝灰岩	正面	館庭宗柏信士	文政 2 年	1819	徳・基礎とも各面の成形成・調整は丁寧である。徳の背面は細かいノミ痕を残し、わずかに磨かせている。
			右面	十二月二日			
49	17-49	凝灰岩	左面	文政二卯年	文政 2 年	1819	徳・基礎とも各面の成形成・調整は丁寧である。徳の背面は細かいノミ痕を残し、わずかに磨かせている。
			正面	寒光玄密信士位			
50	18-50	凝灰岩	右面	十月廿日	享和 3 年	1803	徳・基礎とも各面の成形成・調整は丁寧である。徳の背面は細かいノミ痕を残し、わずかに磨かせている。
			左面	享和三亥天 釋妙順信女 二月朔日			
51	18-51	凝灰岩	正面	妙堂玄微信女位	天保 2 年	1831	徳の背面にノミ痕を残すほかは、各材ともすべて丁寧に成形成・調整されている。
			右面	己六月廿一日			
52	18-52	凝灰岩	左面	天保二辛卯年	明治 13 年	1880	等塔婆形の墓碑であり、各部材を丁寧に仕上げている。
			正面	興心管鏡信女 九月十九日 おつね			
52	18-52	凝灰岩	右面	月海了珠信士 明治十三年 白七月四日	明治 13 年	1880	各材ともすべて丁寧に成形成・調整されている。
			正面	月海了珠信士 明治十三年 白七月四日			

※番号は、第5図の墓碑番号と同じ

第4表 鶴ヶ池遺跡墓碑一覧④

番号	図版番号	石材	碑面	銘文	紀年銘	西暦	備考
53	18-53	凝灰岩	左面	文政十一子年	文政 11年	1828	各材ともすべて丁寧に成形・調整されている。
			正面	俊道了義僧士位			
			右面	俗名 幸藏 八月十四日 卒			
54	18-54	凝灰岩	正面	享保八卯年 法号 釈 惠月位 十一月十二日	享保 8年	1723	背面以外の成形・調整は丁寧である。背面は粗いノミ痕を残している。刻銘に墨を入れている。
55	18-55	凝灰岩	左面	先祖代々 享保八卯十一月十二日	享保 8年 宝暦 6年	1723 1756	背面以外の成形・調整は丁寧である。背面は細かいノミ痕を残している。穂の正面・両側面に彫り沈めがみられる。
			正面	釈面月供上 供 三界萬云先祖 釈壽捐僧士 業			
			右面	宝暦六丁九月七日 一家精突			
56	18-56	凝灰岩	正面	三界萬雲先祖 延命地蔵口吉兵衛先祖供養 明和五子十月吉日	明和 5年	1768	成形・調整はきわめて雑である。背面に粗いノミ痕が残る。進草筆は細線彫刻により、バランスが悪い。
57	19-57	凝灰岩	正面	正徳五未年 法名尼妙心位 五月十四日	正徳 5年	1715	基礎は粗削りし、方形にしたのみ。穂の調整は各面ともやや粗い。
58	19-58	凝灰岩	正面	□□□□ 早世□□童子 □月□□日			基礎は粗削りし、方形にしたのみ。穂の調整は、背面未調整。穂の彫り沈め内に墨書銘がみえるが判読が困難である。
59	19-59	凝灰岩	正面				基礎は粗削りしたのみ。穂正面の彫り沈め内及び向かって左側に墨書銘がみえるが判読不能。
60	19-60	凝灰岩	正面	天明□申年 水次名 釋智芳 八月初九日	天明 8年	1788	背面はノミ痕の上から粗いミガキが施されている。基礎は丁寧な成形・調整が施されている。
61	19-61	凝灰岩	左面	寛政九巳年	寛政 9年	1797	背面はノミ痕の上から粗いミガキが施されている。基礎は丁寧な成形・調整が施されている。
			正面	釋妙琳僧女			
			右面	五月廿日			
62	19-62	凝灰岩	左面	文政二卯年	文政 2年	1819	穂・基礎とも各面の成形・調整はきわめて丁寧である。穂の背面はやや彫らませている。
			正面	釋尼妙嶺僧女			
			右面	四月十七日			
63	19-63	凝灰岩	左面	文政十三寅年	文政 13年	1830	穂の背面のみ細やかなノミ痕がみられるほか、各部分とも成形・調整は丁寧である。刻銘には墨が入れられている。
			正面	釋徳林僧士			
			右面	正月廿四日 俗名□□			
64	19-64	凝灰岩	正面	宝永四年 法名 釈妙念 尼 三月五日	宝永 4年	1707	穂の背面のみ粗いノミ痕がみられるほか、正面・側面とも成形・調整は丁寧である。基礎には粗い加工痕が残る。
65	20-65	凝灰岩	正面	享保元辰年 法名 釈智教位 王四月三日	享保 元年	1716	穂の背面のみ粗いノミ痕がみられるほか、正面・側面とも成形・調整は丁寧である。基礎には粗い加工痕が残る。
			正面	釈妙清僧女			
66	20-66	凝灰岩	右面	嘉永三年正月二日	嘉永 3年	1850	各材ともすべて丁寧に成形・調整されている。穂の背面はわずかに彫らませている。
67	20-67	凝灰岩					穂の正面に彫り沈めがみられるが、刻書・墨書とも確認できない。基礎には粗削り面が残る。穂の背面には粗いノミ痕が残る。
68	20-68	凝灰岩	左面	文政七申年	文政 7年	1824	穂の背面のみ粗いノミ痕がみられるほか、右面には刻銘のほか「六〇」の墨書銘がみられる。
			正面	釋涼接僧士			
			右面	六月廿七日			
69	20-69	凝灰岩					穂の背面のみ粗いノミ痕がみられるほか、各材とも成形・調整が丁寧である。墨書銘があるが、判読不能。

※番号は、第5図の墓碑番号と同じ

第5表 鶴ヶ池遺跡墓碑一覧⑤

番号	図版番号	石材	碑面	銘文	紀年銘	西暦	備考
70	20-70	凝灰岩					穂背向のみ粗いノミ痕がみられる。基礎の調整はきわめて粗い。穂正面に彫り沈めがあり、墨書銘があるが、判読不能。
71	20-71	凝灰岩	左面	大保十三寅年	天保 13年	1842	各部材とも成形・調整はきわめて丁寧である。穂の正面の彫り沈めは深い。
			正面	釈尼妙教童女			
			右面	三月十三日			
72	20-72	凝灰岩	正面	享保十二年未年 釈妙正栄位 三月九日	享保 12年	1727	穂背向のみ粗いノミ痕がみられる。基礎の調整は粗い。
73	20-73	凝灰岩	正面	釋□□信□位			調整は各部材とも丁寧。正面の銘文は墨書。背面をわずかに彫らませる。笠塔婆型。
74	21-74	凝灰岩	正面	享保十七子年 釈妙曉尼 二月十二日	享保 17年	1732	上部欠失。穂背向のみ粗いノミ痕がみられる。
75	21-75	凝灰岩	正面	文化十三子 釈妙濃尼位 七月二日	文化 13年	1816	穂の背向のみ粗いノミ痕がみられるほか、各部材とも成形・調整とも丁寧である。
76	21-76	凝灰岩	正面	寛政五癸丑 水衣名釋淨登 八月十五日	寛政 5年	1793	穂の背向のみノミ痕の上からミガキが施されているほか、成形・調整とも丁寧である。
77	21-77	凝灰岩	正面	寛政七卯天 釋貞童女 正月五日	寛政 7年	1795	穂の背向のみ粗いノミ痕が残されている。基礎は成形・調整とも雑である。
78	21-78	凝灰岩	正面	釋妙誓法尼	天保 4年	1833	各部材ともすべて丁寧に成形・調整されている。穂の背向のみ粗いノミ痕がみられる。基礎は成形は丁寧だが、調整が粗い。
			右面	天保四門閏九月廿四日			
79	21-79	凝灰岩	正面	文化七午年 釋貞童女 五月五日	文化 7年	1810	穂の背向のみノミ痕が残されている。基礎は成形は丁寧だが、調整が粗い。
80	21-80	凝灰岩	正面	明和乙酉年 釋宗信居士 八月八日	明和 2年	1765	穂の各面は成形・調整とも丁寧、除刻による差草履は指張りでバランスも悪い。
81	21-81	凝灰岩	左面	文政十二丑天	文政 12年	1829	穂の背向のみノミ痕がみられる。
			正面	智縁童子位			
			右面	十月廿九日			
82	22-82	凝灰岩	左面	文化十歳	文化 10年	1813	穂・基礎とも丁寧に仕上げ、穂の背向も丸く彫らませ丁寧に仕上げている。
			正面	釋秋光童女			
			右面	閏七月十九日			
83	22-83	凝灰岩	正面	天明八戊申年 釈明了 童子 八月十八日	天明 8年	1788	穂の背向のみノミ痕がみられる。
84	22-84	凝灰岩	正面	文化六巳年 釈明善 童女 正月廿八日	文化 6年	1809	穂の背向のみノミ痕がみられる。
85	22-85	凝灰岩	正面	明和四亥年 法名 釈空誓 二月四日	明和 4年	1767	穂の背向のみノミ痕を磨いて消しているもの、やや粗い調整である。
86	22-86	凝灰岩	正面	文化元年 見外妙脱童女 子八月九日	文化 元年	1804	穂の背向のみ粗いノミ痕がみられる。
87	22-87	凝灰岩	左面	安政二卯八月十一日	安政 2年	1855	穂の背向のみノミ痕を磨いて消して丸く仕上げている。
			正面	釋妙教法尼			
88	22-88	凝灰岩	左面	万延元申 十一月廿六日	万延 元年	1860	穂の背向のみノミ痕を磨いて消して丸く仕上げている。
			正面	釋教念信士			
			正面	釋善秀信士			
89	22-89	凝灰岩	右面	慶應三卯 六月廿五日 勝七	慶應 3年	1867	各面とも丁寧に仕上げられている。穂の背向のみ丸く仕上げている。
90	23-90	凝灰岩	正面	寛政八辰辰 釋貞國尼 六月廿六日	寛政 8年	1796	各面とも丁寧に仕上げられている。穂の背向のみ丁寧なノミ痕が残る。

※番号は、第5図の墓碑番号と同じ

第6表 鶴ヶ池遺跡墓碑一覧⑥

番号	図版番号	石材	碑面	銘文	紀年銘	西暦	備考
91	23-91	凝灰岩	正面	寛保三庚天 妙康信女 八月十七日	寛保3年	1743	穂の整形は雑であり、側面と背面にノミ痕を残す。
			左面	文化己巳年			
92	23-92	凝灰岩	正面	辰尼智願童女	文化6年	1809	穂の背面のみ粗いノミ痕がみられる。
			右面	七月十九日			
			左面	天明二〇〇年			
93	23-93	凝灰岩	正面	釈迦尊童尼	天明2年	1782	正面下端の蓮華座は浮彫り。
			右面	八月晦日			
			左面	文政十二年寅年			
94	23-94	凝灰岩	正面	釋妙光尼位	文政12年	1829	整形はやや雑であり、背面には粗い加工痕を残す。
			右面	十月十四日 俗名□□			
			左面	嘉永六丑 十二月七日	嘉永5年	1852	各面とも丁寧に仕上げられている。穂の背面のみ九く仕上げている。
			正面	釋林成僧士			
96	23-96	凝灰岩	正面	宝曆十辰 釈善空 二月二日	宝曆10年	1760	成形・調整ともやや雑である。背面に細かいノミ痕がみられる。正面の彫り沈めは深い。
97	23-97	凝灰岩	正面	宝曆六子 法名釋智信士 九月七日	宝曆6年	1756	基礎は自然石を荒削りしたのみ。側面・背面には粗いノミ痕が残る。
98	23-98	凝灰岩	正面	明和七亥年 釋妙順心尼 十二月四日	明和7年	1770	各面とも丁寧に仕上げられている。穂の背面のみ九く仕上げている。
99	24-99	凝灰岩	正面	□□元年甲 □□□□女文			側面・背面にノミ痕が残る。銘文は墨書による。
100	24-100	凝灰岩	正面	早逝實□			側面・背面にノミ痕が残る。銘文は墨書による。
			左面	安永四年			
101	24-101	凝灰岩	正面	釋空雲上 十一月卅日	安永4年	1775	基礎は自然石を荒削りしたもの。背面にノミ痕が残る。正面下端の蓮華座は彫刻。刻銘には墨を入れている。
			右面				
102	24-102	凝灰岩	正面	天明元丑天 白沙童女 壬五月廿八日	天明元年	1781	基礎は自然石を荒削りしたもの。成形は粗く、背面にノミ痕が残る。
103	24-103	凝灰岩	正面	寛政六寅天 惠春童子 十二月十一日	寛政6年	1794	基礎は自然石を荒削りしたもの。成形は粗いが、各面とも磨いている。
104	24-104	凝灰岩	正面 右面	春薫妙茶信女 文化十子三月十一日	文化10年	1813	穂・基礎とも成形・調整とも丁寧。元号と丁字が異なる。
106	24-105	凝灰岩	正面	寛政八辰 茅家妙安信女 二月廿八日	寛政8年	1796	基礎1段目は調整がやや粗く、ノミ痕を残す。基礎2段目は背面に細かいノミ痕を残す。穂は背面にノミ痕を残し、九く仕上げられているほかは、成形・調整とも丁寧である。
106	24-106	凝灰岩	正面	文政元寅天 家山映雪信士 十二月廿六日	文政元年	1818	成形・調整とも粗く、上面・側面に細かいノミ痕を残す。背面は粗い成形のままである。
107	24-107	凝灰岩	左面	安政七申正月二日 □右□門	安政7年	1860	穂・基礎とも丁寧に仕上げている。穂の背面も平紐で丁寧に仕上げている。
			正面	春岸知柳僧士			
			左面	文政六未年			
108	24-108	凝灰岩	正面	釋秋信僧十位 俗名 善歳	文政6年	1823	穂は背面にノミ痕を残し、九く仕上げられているほかは、成形・調整とも丁寧である。
			右面	八月十一日			
			左面	寛延三庚午歳	寛延3年	1750	上面に降棒(突縁)の表現がみえる。正面・側面に彫り沈めがみられる。右面の刻銘は削り消している痕跡がみられる。
109	25-109	凝灰岩	正面	宝曆七丑年 法空白性信士 四月十四日	宝曆7年	1757	
			右面	五月三十一日			

※番号は、第5図の墓碑番号と同じ



第7表 鶴ヶ池遺跡墓碑一覧⑦

番号	図版番号	石材	碑面	銘文	紀年銘	西暦	備考
110	25-110	凝灰岩	左面	文政十一年子天	文政11年	1828	徳は背面を含め成形・調整とも丁寧である。
			正面	法水童女位 俗名			
			右面	五月廿日 おいそ			
111	25-111	凝灰岩	正面	宝暦七丁巳年 法名 釈妙海信女 二月十八日	宝暦7年	1757	基礎は自然石を荒削りしたもの。成形は粗く、背面にノミ痕が残る。
112	25-112	凝灰岩	左面	天保三辰年十月七日	天保3年	1832	徳・基礎とも丁寧な仕上げである。徳の背面にはノミ痕が残るが、その上から磨いている。
			正面	釋 正願信士位 俗名 字平			
113	25-113	凝灰岩	左面	字平 俗名 □母	天保10年	1839	徳・基礎とも丁寧に仕上げている。刻銘には墨を入れている。
			正面	天保十亥天 釈妙作法尼 正月四日			
114	25-114	凝灰岩	左面	弘化三年五月廿七日	弘化3年	1846	徳・基礎とも丁寧な仕上げである。
			正面	釋妙蓋法尼 字平			
			右面	京寛			
115	26-115	凝灰岩	正面				徳・基礎とも丁寧に仕上げている。正面には墨書銘がみえるが判読不能。
116	26-116	凝灰岩	左面	安政五年正月二日	安政5年	1858	徳・基礎とも丁寧な仕上げである。
			正面	釋 奉親信士			
			右面	俗名 伊之藏			
117	26-117	凝灰岩	左面	天保六未天	天保6年	1835	徳の背面を除き、徳・基礎とも丁寧な仕上げである。
			正面	釈尼妙智童女 俗名			
			右面	六月六日 おむめ			
118	26-118	凝灰岩	左面	慶應回辰 八月三日	慶應4年	1868	徳のみ。各面とも丁寧な仕上げ。
			正面	釋得住信士			
119	26-119	凝灰岩	左面	安政二卯 十月廿一日	安政2年	1855	徳のみ。各面とも丁寧な仕上げ。背面をやや影らませる。
			正面	釋智願童子			
120	26-120	凝灰岩	左面	天保二卯年	天保2年	1831	徳のみ。背面がやや粗いほかは丁寧な仕上げである。
			正面	釈尼妙光童女 俗名			
			右面	二月廿四日 おみ□			
121	26-121	凝灰岩	正面	寛政五癸丑 樹林妙貞信女 十一月廿三日	寛政5年	1793	徳のみ。背面がやや粗いほかは丁寧な仕上げである。
122	26-122	凝灰岩	正面	宝暦十一巳 法名 釋宗元 五月廿六日	宝暦11年	1761	徳のみ。背面がやや粗いほかは丁寧な仕上げである。
123	26-123	凝灰岩	正面	文化七庚午 釋淨蓮位 九月廿二日	文化7年	1810	徳のみ。
124	26-124	凝灰岩	左面	文政十三寅年	文政13年	1830	徳のみ。各面とも丁寧な仕上げ。
			正面	釋尼妙金法尼 位			
			右面	八月初十日 おつね □			
125	26-125	凝灰岩	左面	文化十三年	文化13年	1816	徳のみ。各面とも丁寧な仕上げ。
			正面	釈 祐信信士位 俗名			
			右面	九月十六日 又青			

※番号は、第5図の墓碑番号と同じ

第8表 鶴ヶ池遺跡墓碑一覧③

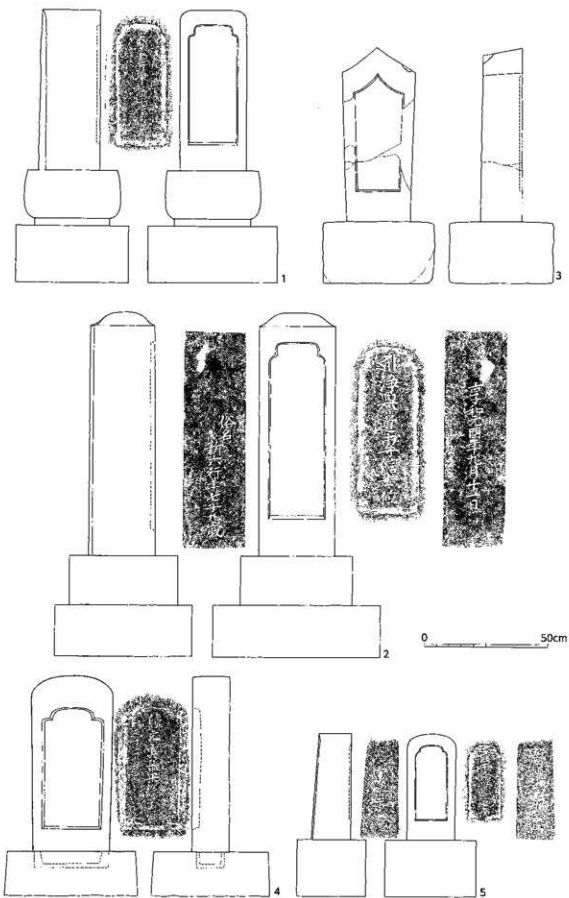
番号	図版番号	石材	碑面	銘文	紀年銘	西暦	備考
126	27-126	凝灰岩	左面	大保十四年	天保14年	1843	徳のみ。各面とも丁寧な仕上げ。
			正面	釋智了位			
			右面	卯十月十三日 猪藏			
127	27-127	凝灰岩	左面	慶應三卯 二月七日	慶應3年	1867	徳のみ。各面とも丁寧な仕上げ。背面を少し彫ら ませる。
			正面	釋淨念信士信士			
128	27-128	凝灰岩	正面	釋善張信士	嘉永5年	1852	徳のみ。各面とも丁寧な仕上げ。背面を少し彫ら ませる。
右面	嘉永五子七月十三日 五右衛門安						
129	27-129	凝灰岩	左面	文政七申年	文政7年	1824	徳のみ。各面とも丁寧な仕上げ。
			正面	釋嚴淨信士位			
			右面	姓名 五月十四日 村藏			
130	27-130	凝灰岩	左面	天保十四卯二月廿三日	天保14年	1843	徳のみ。背面をのぞき、各面とも丁寧な仕上げ。
			正面	釋妙全法尼			
			右面	大結 小右エ門師 マス			
131	27-131	凝灰岩	正面	宝曆三丙天 法名釈妙海信女 九月卅日	宝曆3年	1753	徳のみ。背面をのぞき、各面とも丁寧な仕上げ。
132	27-132	凝灰岩	正面	宝曆四戌天 法名釈妙安尼 二月廿二日	宝曆4年	1754	徳のみ。背面をのぞき、各面とも丁寧な仕上げ。
133	27-133	凝灰岩	左面	六十八才 九兵衛安	安政3年	1856	徳のみ。各面とも丁寧な仕上げ。
			正面	釋智證信士			
			右面	安政三巳五月九日 言藏父			
134	27-134	凝灰岩	正面	釋西心信上院位			徳のみ。背面をのぞき、各面とも丁寧な仕上げ。
			右面	十二月二十日			
135	27-135	凝灰岩	正面	文政六未年	文政6年	1823	徳のみ。背面をのぞき、各面とも丁寧な仕上げ。 背面を少し彫らませる。
			右面	釈善光信女 二月十日			
136	27-136	凝灰岩	正面	□□□寅年 □□高空庵信女矣 □□十八日			徳のみ、背面をのぞき、各面とも丁寧な仕上げ。 背面を少し彫らませる。
137	28-137	凝灰岩	正面	享和三亥天 老山□大信女 八月三日	享和3年	1803	徳のみ。背面をのぞき、各面とも丁寧な仕上げ。 背面を少し彫らませる。
138	28-138	凝灰岩	左面	俗名孫六安			徳のみ。背面をのぞき、各面とも丁寧な仕上げ。
			正面	玄法了機信士			
139	28-139	凝灰岩	正面	寛政八丙辰 釈貞教 七月十一日	寛政8年	1796	徳のみ。背面をのぞき、各面とも丁寧な仕上げ。 背面を少し彫らませる。
140	28-140	凝灰岩	左面	文政四巳年	文政4年	1821	徳のみ。各面とも丁寧な仕上げ。背面を少し彫ら ませる。
			正面	釈尼妙令信女			
141	28-141	凝灰岩	正面	宝曆七丑天 法名 釈空海信士 三月十九日	宝曆7年	1757	徳のみ。背面をのぞき、各面とも丁寧な仕上げ。 背面を少し彫らませる。
142	28-142	凝灰岩	正面				徳のみ。各面とも丁寧な仕上げ。銘は確認できな い。
143	28-143	凝灰岩	左面	享和三亥天	享和3年	1803	徳のみ。背面をのぞき、各面とも丁寧な仕上げ。 背面を少し彫らませる。
			正面	釋純運信士			
144	28-144	凝灰岩	正面	宝曆六丁天 法名釈空賢童子 八月廿七日	宝曆6年	1756	徳のみ。成形・調整ともやや粗い。背面は未調整。

※番号は、第5図の墓碑番号と同じ

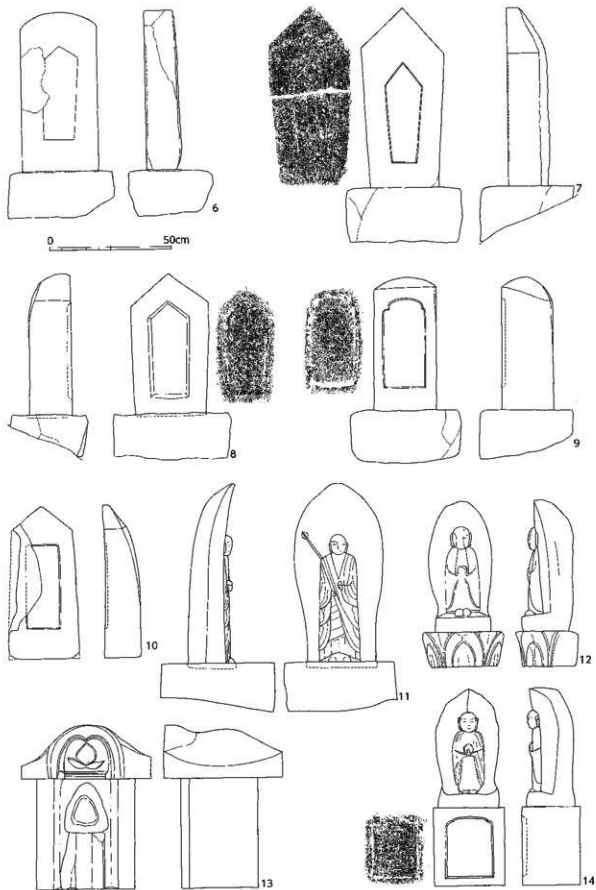
第9表 鶴ヶ池遺跡墓碑一覧⑨

番号	図版番号	石材	碑面	銘文	紀年銘	西暦	備考
145	28-145	凝灰岩	正面	宝曆八寅年 南家妙薫信女 八月廿七日	宝曆 8 年	1758	礎のみ。成形・調整ともやや粗い。背面は未調整。鐫刻による墓草屋は雑であり、バランスも悪い。
146	28-146	凝灰岩	正面	寛政八丙辰 法名 歌仙賀 八月廿四日	寛政 8 年	1796	礎のみ。背面をのぞき、各面とも丁寧な仕上げ。
147	28-147	凝灰岩	正面	享保三戊戌年 敬元太性門空供士 九月二十五日	享保 3 年	1718	礎のみ。成形・調整ともやや粗い。背面は未調整。銘文は墨書による
148	28-148	凝灰岩	正面	享保十三申年 清院禪了信士 五月廿三日	享保 13 年	1728	礎のみ。成形・調整ともやや粗い。背面は未調整。

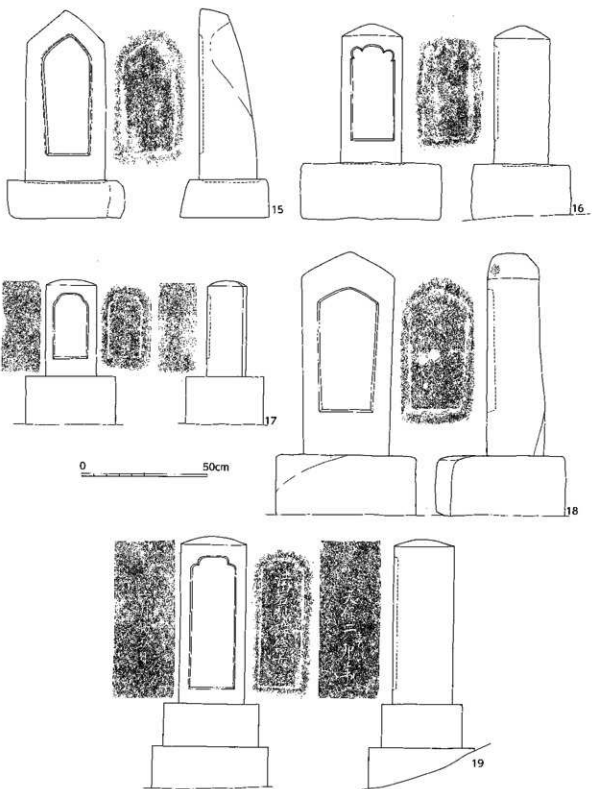
※番号は、第5図の墓碑番号と同じ



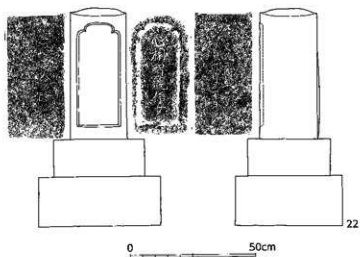
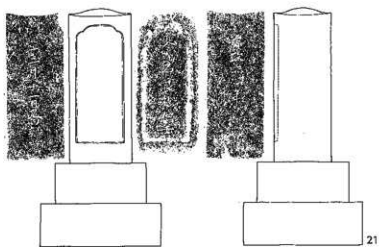
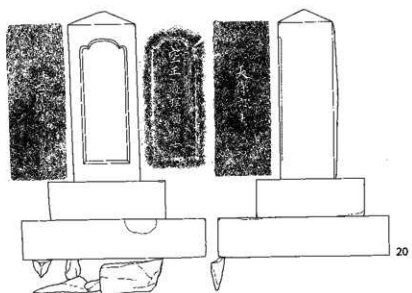
第10图 鶴ヶ池遺跡近世墓碑① (1/15)



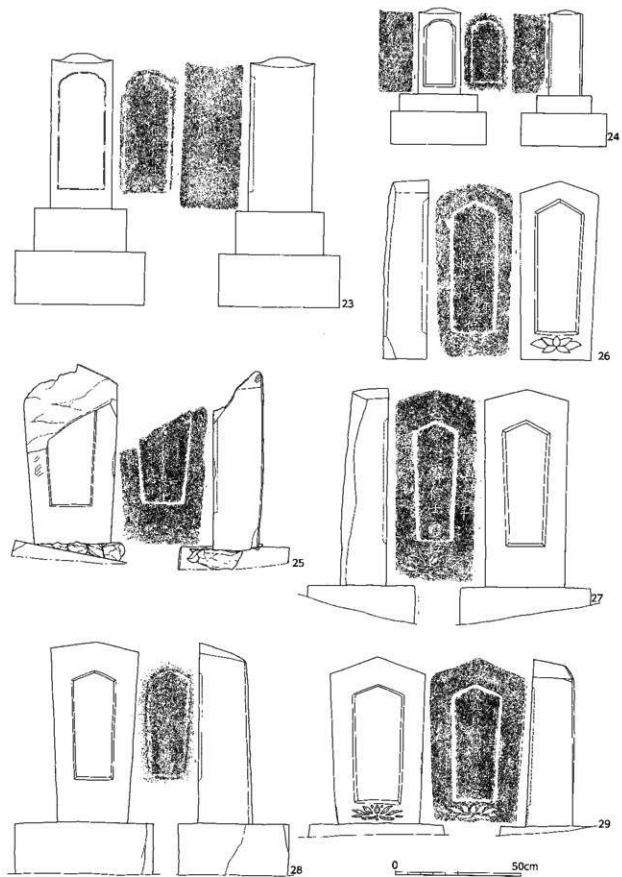
第11图 鷺ヶ池遺跡近世墓碑② (1/15)



第12图 鹤ヶ池遺跡近世墓碑③ (1/15)

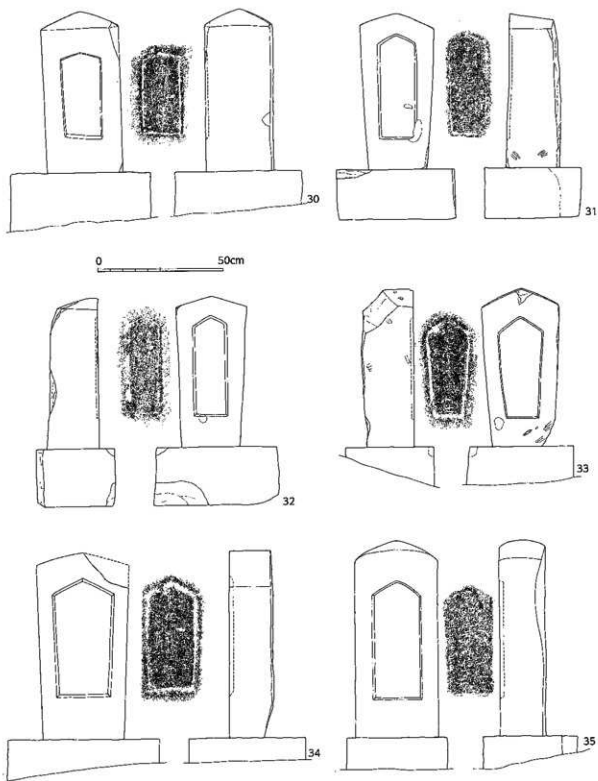


第13图 鹤ヶ池遺跡近世墓碑④ (1/15)

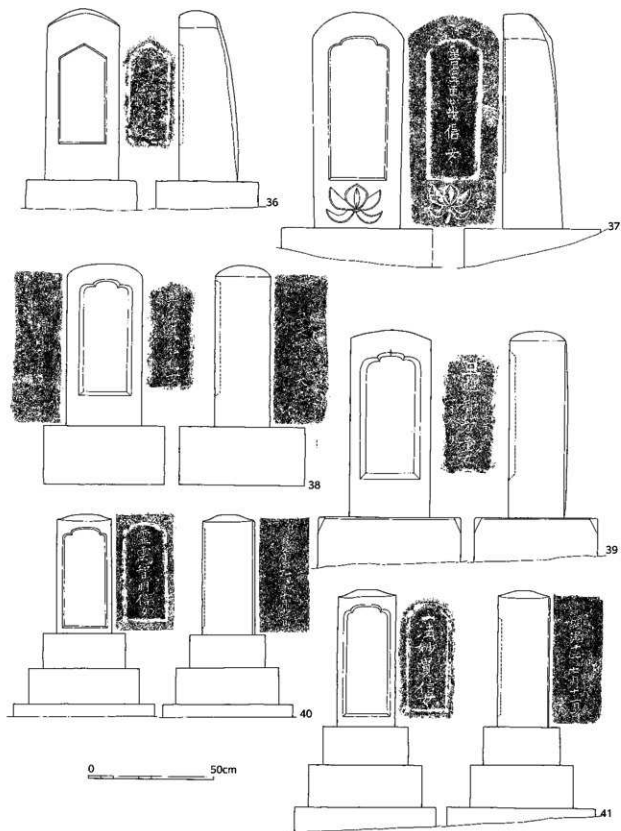


第14圖 鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑤ (1/15)

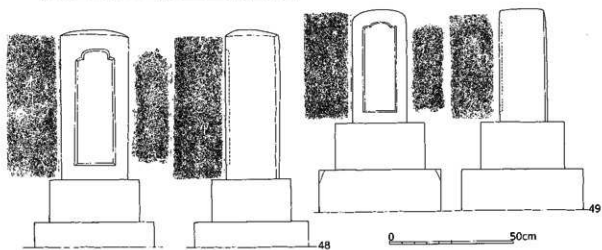
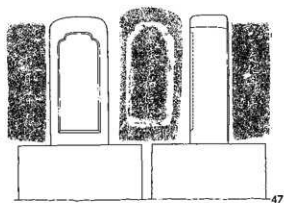
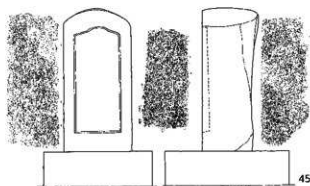
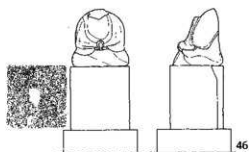
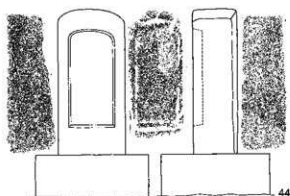
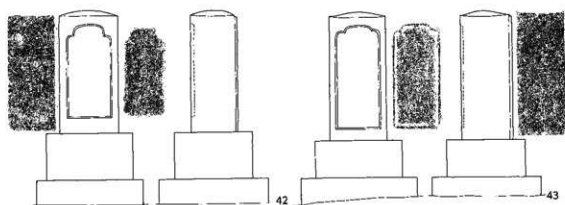




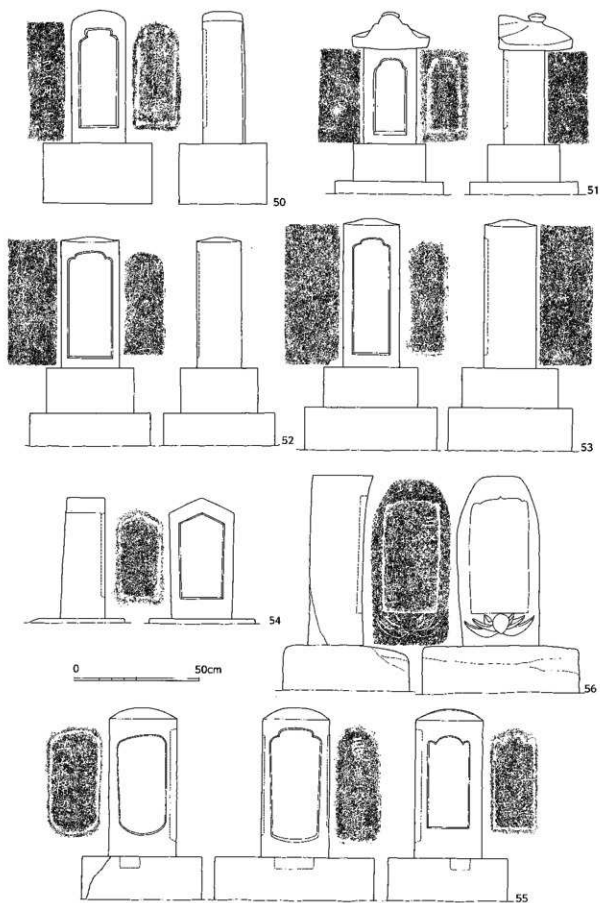
第15図 鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑥ (1/15)



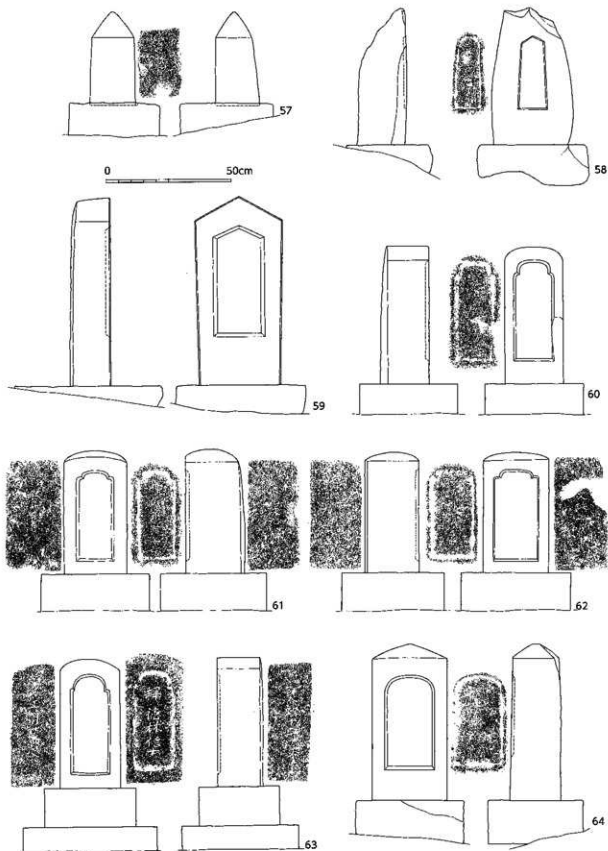
第16图 鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑦(1/15)



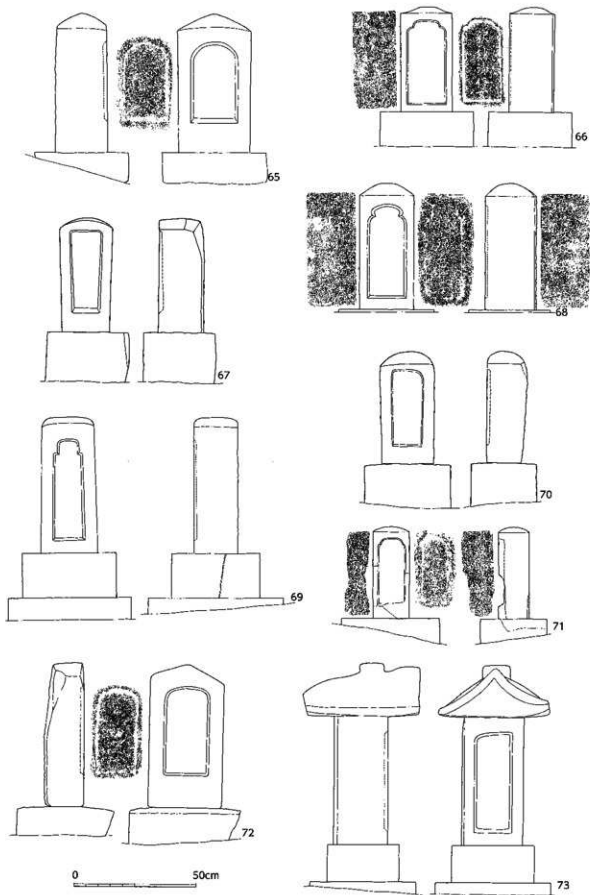
第17図 鶴ヶ池遺跡近世墓碑③ (1/15)



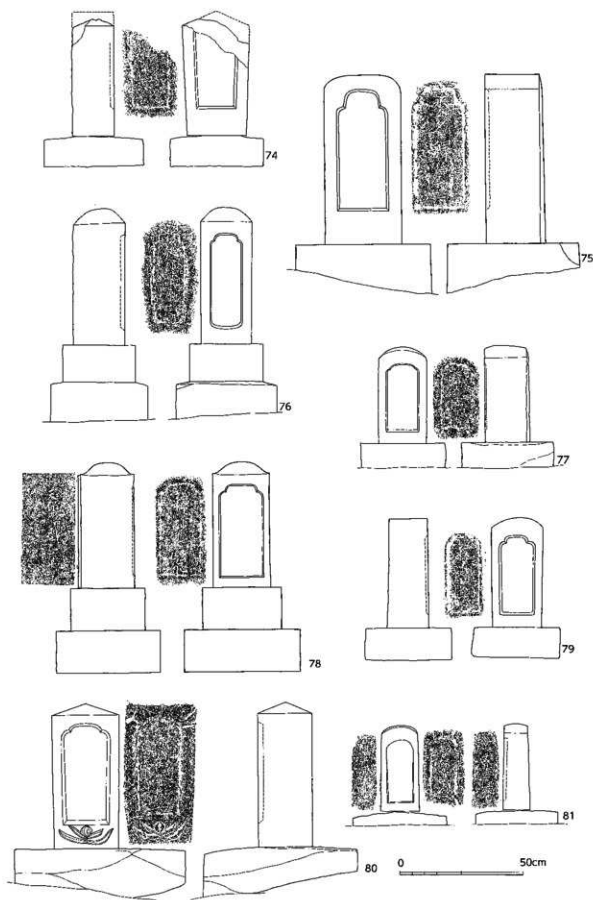
第18回 鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑨ (1/15)



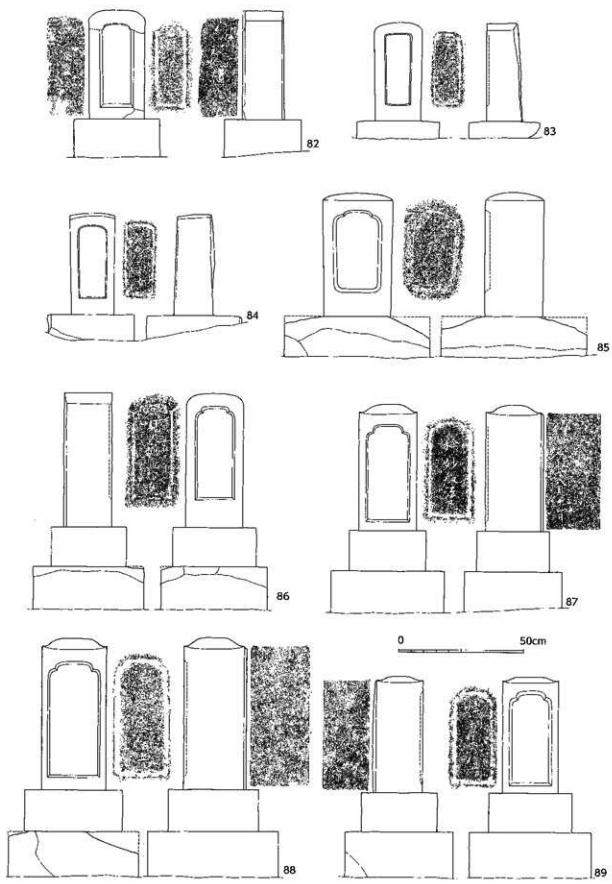
第19圖 鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑩ (1/15)



第20图 鶴ヶ池遺跡近世墓碑① (1/15)

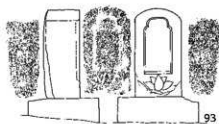
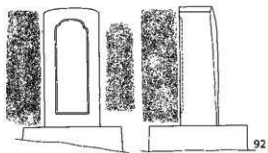
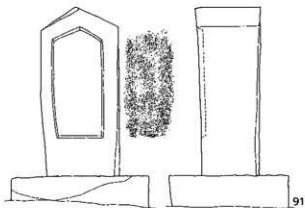
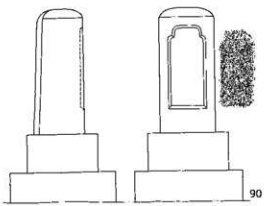


第21図 箱ヶ池遺跡近世墓碑② (1/15)

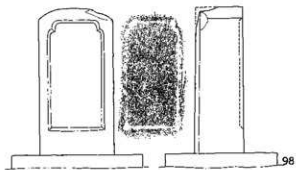
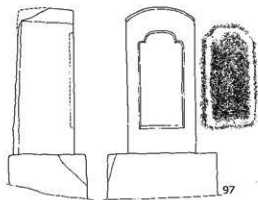
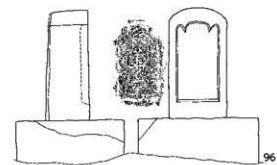
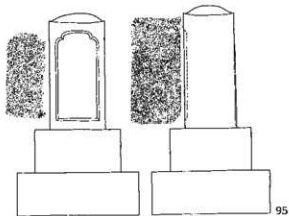
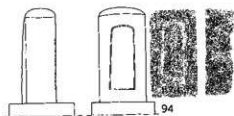


第22图 鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑬ (1/15)

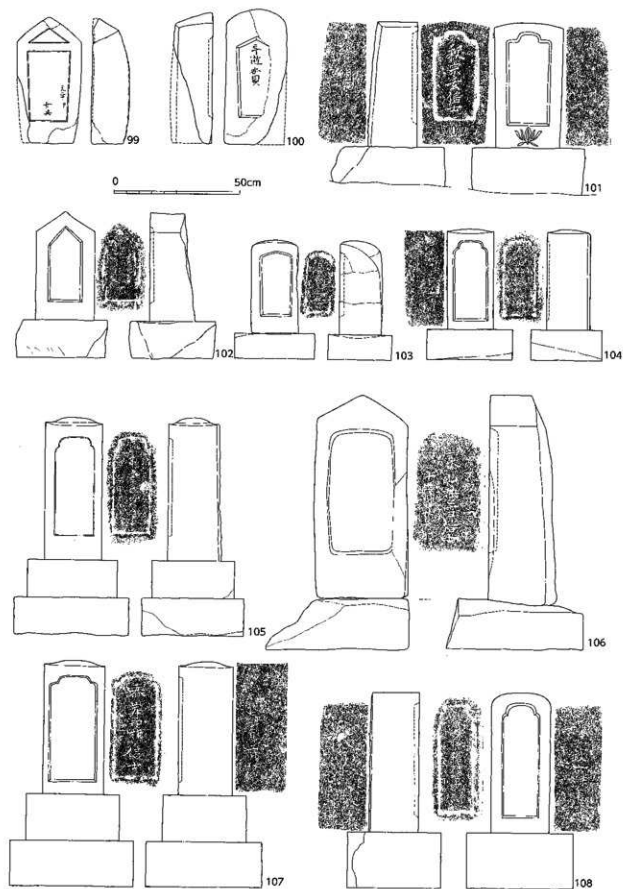




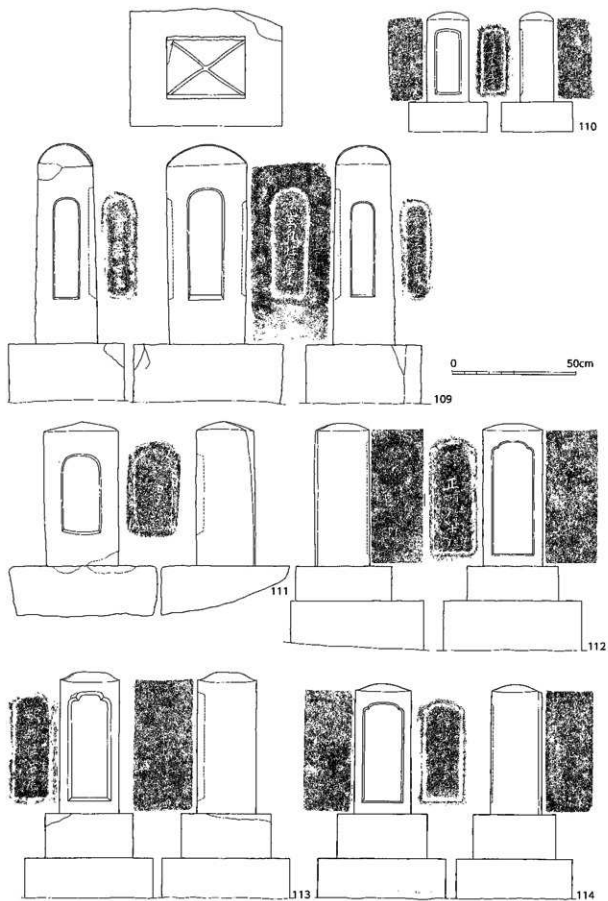
0 50cm



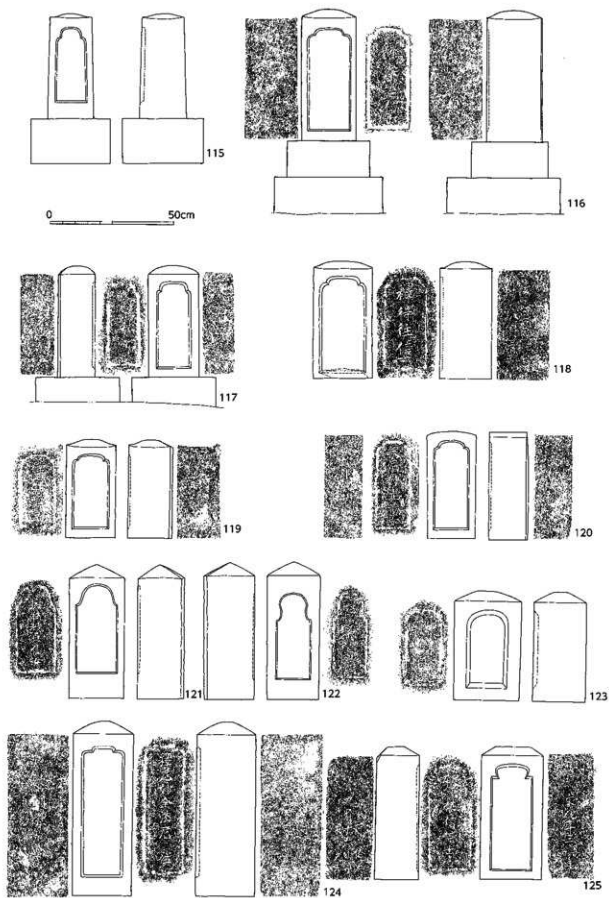
第23图 船ヶ池遺跡近世墓碑⑩ (1/15)



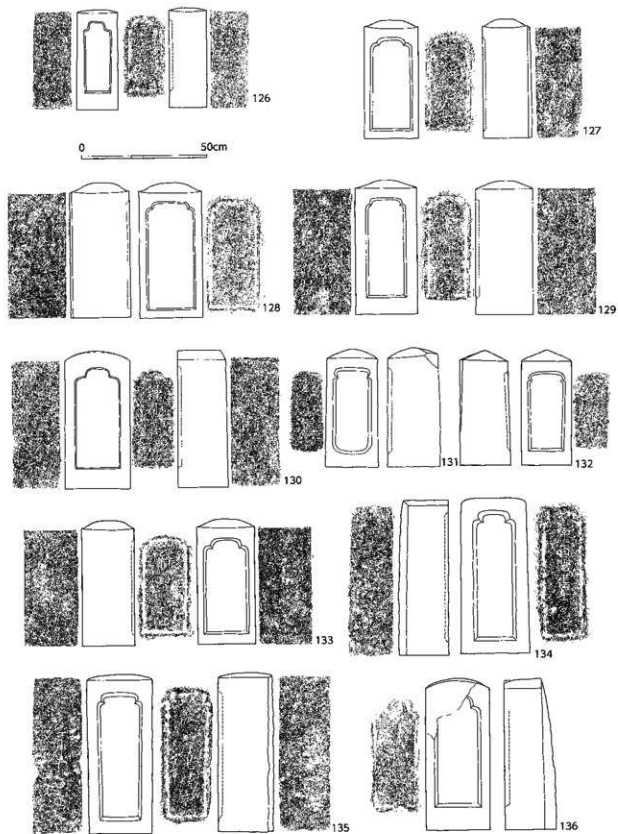
第24图 鹤ヶ池遺跡近世墓碑⑮ (1/15)



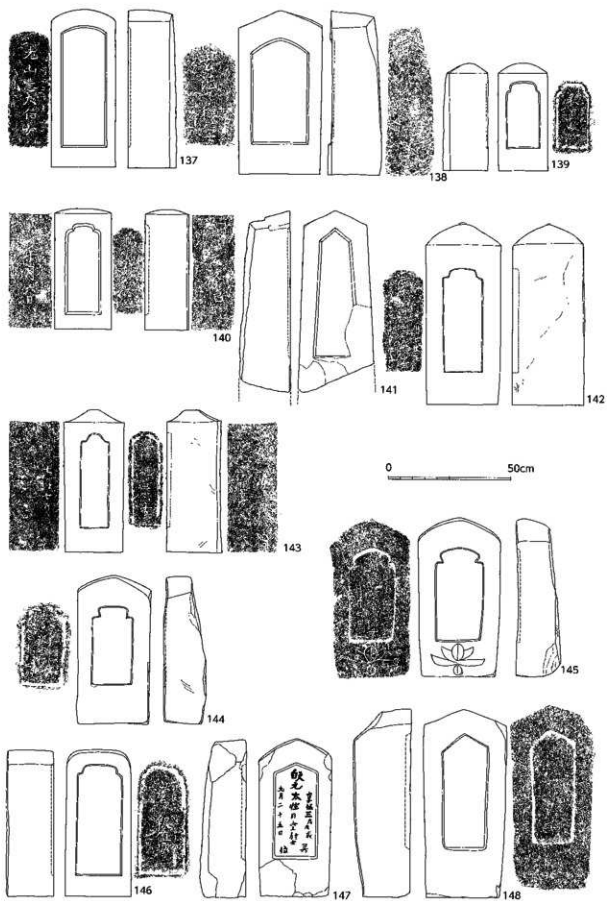
第25図 鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑥ (1/15)



第26图 鹤ヶ池遺跡近世墓碑⑦ (1/15)



第27图 船ヶ池遺跡近世墓碑⑧ (1/15)



第28图 鶴ヶ池遺跡近世墓碑⑨ (1/15)

第10表 大久保遺跡墓碑一覧①

番号	図版番号	石材	碑面	銘文	紀年録	西暦	備考
1	29-1	凝灰岩	正面	師貞 天和三亥曆 江岳了水禪定尼 龕位 三月十八日	天和3年	1683	徳のみ。蓮華座は浅くかつ丸く彫り込めている。
2	29-2	凝灰岩	正面	延宝八年申 其学宗園禪定門 龕位 六月廿八日	延宝8年	1680	徳のみ。銘文は除刻後に墨を入れている。蓮華座は浅くかつ丸く彫り込めている。背面の調整は粗く、ノミ痕が残る。
3	29-3	凝灰岩	正面	延宝九年酉 石室誓衆 龕位 十月廿四日	延宝9年	1681	徳のみ。全体的に成形・調整は粗く、背面にはノミ痕が残る。銘文は除刻後に墨を入れている。
4	29-4	凝灰岩	正面	元禄四辛未曆 春月妙照禪定尼 式位 二月十七日	元禄4年	1691	徳のみ。下部の蓮華座以外は線刻。蓮華座は浅くかつ丸く彫り込めている。
5	29-5	凝灰岩	正面	享保七壬寅年 善性草女 龕位 正月十八日	享保7年	1722	徳のみ。碑身上部に山型の除刻線が残るが、割付線であろうか。
6	29-6	凝灰岩	正面	元禄十丑年 即空宗真禪定門 十一月廿九日	元禄10年	1697	徳のみ。銘文は除刻後に墨を入れている。全体的に調整は雑であり、背面にはノミ痕が残る。
7	30-7	凝灰岩	正面	享保七千寅年 牛園宗白禪定門 龕位 二月十五日	享保7年	1722	徳のみ。蓮華座は線刻。背面は粗整形。
8	30-8	凝灰岩	正面	享保四己未年 一栄童子 龕位 三月十日	享保4年	1719	徳のみ。碑身下部に台状の模様を線刻。側面・背面に粗いノミ痕が残る。背面隅を面取りしている。
9	30-9	凝灰岩	正面	正徳六丙申年 芳庭宗薫禪定門 龕位 閏二月七日	正徳6年	1716	徳のみ。銘文は除刻後に墨を入れている。
10	30-10	凝灰岩	正面	□□丁亥年 龍岩妙珠信□ 式位 十一月二日	宝永4年	1707	徳のみ。上半部は欠失。碑面下部に線刻模様あり。
11	30-11	凝灰岩	正面	宝永七庚寅年 秋岩道桂禪定門 龕位 八月初三日	宝永7年	1710	徳のみ。蓮華座は墨書。銘文は除刻後に墨を入れている。背面は未調整。
12	30-12	凝灰岩	正面	享保七壬寅歲 智権童子 龕位 正月廿二日	享保7年	1722	徳のみ。銘文は除刻後に墨を入れている。碑身下部を丸く彫らさせている。背面は丸く彫らませ、ノミ痕が残る。
13	31-13	凝灰岩	正面	享保十乙巳年 禪餘了喜信士 龕位 九月初六日	享保10年	1725	徳のみ。蓮華座は線刻線刻。正面彫り込めに向かつて右の枠外に墨書銘が見えるが、判読不能。全体的に調整は雑であり、背面にはノミ痕が残る。
14	31-14	凝灰岩	正面	享保三戊戌季 泰道了安信士 龕位 七月初二日	享保3年	1718	徳のみ。蓮華座は輪郭を線刻後に兼筆を墨書している。背面は粗調整。
15	31-15	凝灰岩	正面	□□□□申年 □□知雪信女 龕位 □月初五日			徳のみ。銘文は墨書。蓮華座は素研彫りされている。背面はやや彫らさせている。
16	31-16	凝灰岩	正面	正徳六乙未年 即轉妙□禪定尼 龕位 十月十六日	正徳6年	1716	徳のみ。「乙未」の年は正徳5年であり、正徳6年は6月22日に改元されているため、正徳5年の誤刻であろう。蓮華座は墨書。背面はノミ痕を残す。

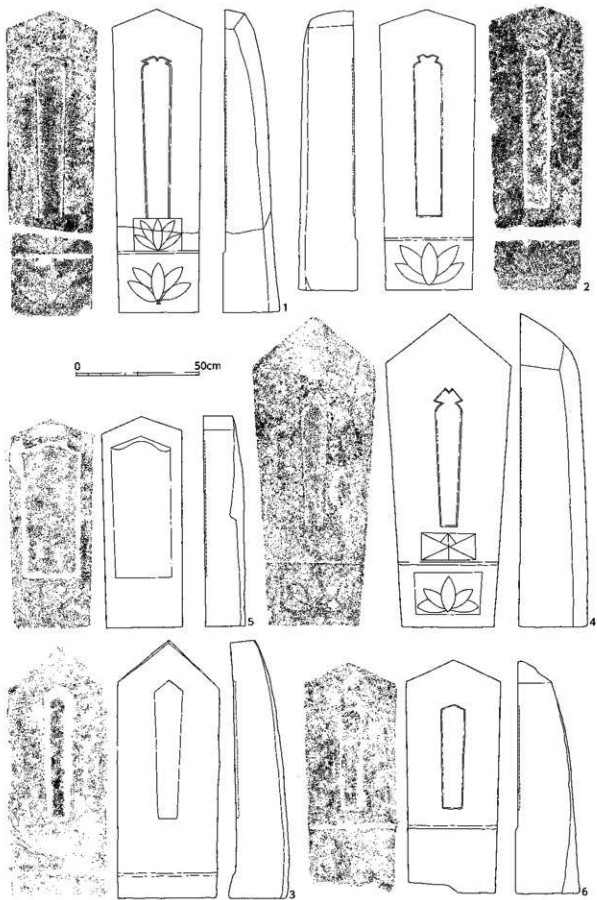
※番号は、第7図の基碑番号と同じ

第11表 大久保遺跡墓碑一覽②

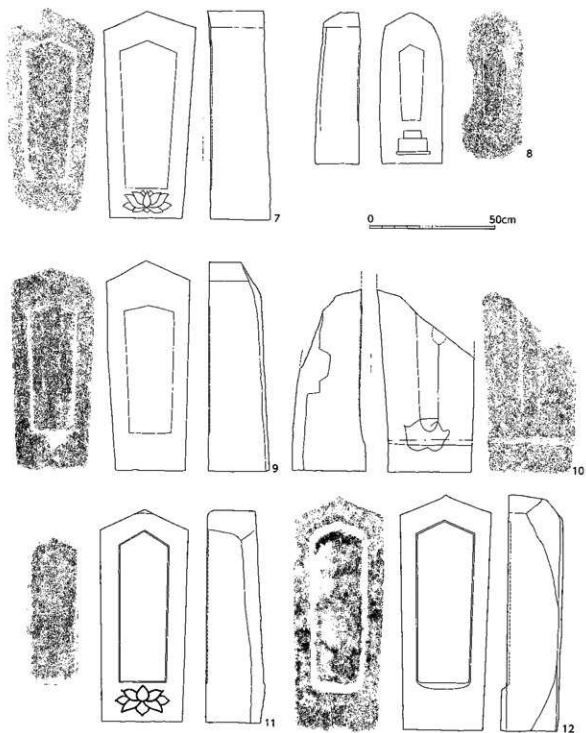
番号	図版番号	石材	碑面	銘文	紀年銘	西暦	備考
17	32-17	凝灰岩					2段成形の基礎。上面内端に2か所円形の穿孔と楕を据える方形彫り沈めがみられる。成形・調整は雑。
18	32-18	凝灰岩					基礎。上面に楕を据える方形彫り沈めがみられる。成形・調整は雑。
19	32-19	凝灰岩					基礎。上面に楕を据える方形彫り沈めがみられるが、きわめて浅く前半部のみが残る。成形・調整は雑。
20	32-20	凝灰岩					基礎。上面に楕を据える方形彫り沈めがみられる。成形・調整は雑。
21	32-21	凝灰岩					基礎。成形・調整は比較的丁寧。上面前方に2か所円形の穿孔がみられる。
22	33-22	凝灰岩					基礎。成形・調整は雑。
23	33-23	凝灰岩					基礎。成形・調整は比較的丁寧。上面前方に2か所、小さく浅い円形の穿孔がみられる。
24	33-24	凝灰岩					基礎。成形・調整は比較的丁寧。上面前方中央に浅いT字状の彫り沈めがみられる。
25	33-25	凝灰岩					基礎。上面の楕を据えた場所に灰色の変色箇所がみられる。上面に墨がまだら状に残されているが、文様等を意識したものではない。成形・調整は比較的丁寧。
26	33-26	凝灰岩					基礎。上面に楕を据える方形彫り沈めがみられるが、角の一つは上面が欠損しているため、方形を望まず、丸く仕上げられている。成形・調整は雑。
27	34-27	凝灰岩					基礎。上面に楕を据える目安となる方形陰刻線がみられるほか、前方中央に浅いT字状の彫り沈めとそれを挟んで両側に円形の穿孔がみられる。成形・調整は比較的丁寧。
28	34-28	凝灰岩					基礎。上面に陰刻線がみられる。成形・調整は丁寧。
29	34-29	凝灰岩					基礎。上面前方中央に浅いT字状の彫り沈めがみられる。成形・調整は比較的丁寧。
30	34-30	凝灰岩					基礎。上面前方中央に浅いT字状の彫り沈めとそれを挟んで両側に円形の穿孔がみられる。成形・調整は比較的丁寧。
31	34-31	凝灰岩					基礎。上面に陰刻線がみられる。成形・調整は丁寧。

※番号は、第7図の墓碑番号と同じ

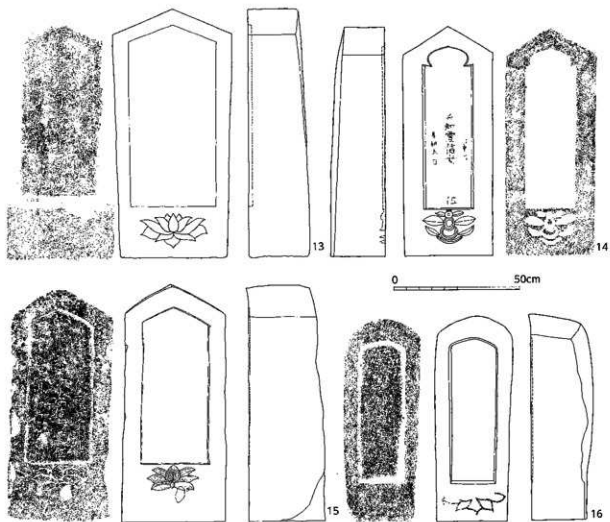




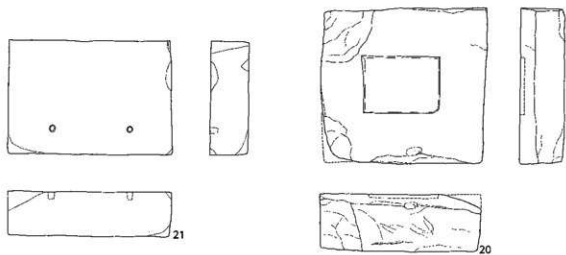
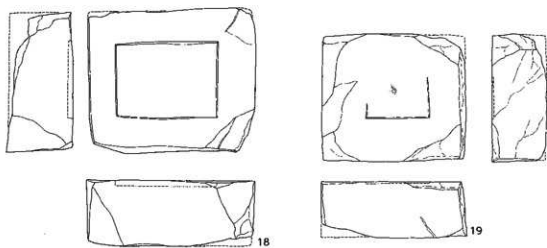
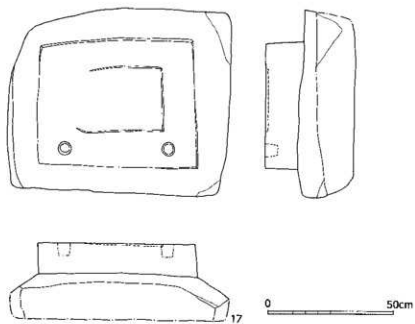
第 29 图 大久保遺跡近世墓碑① (1/15)



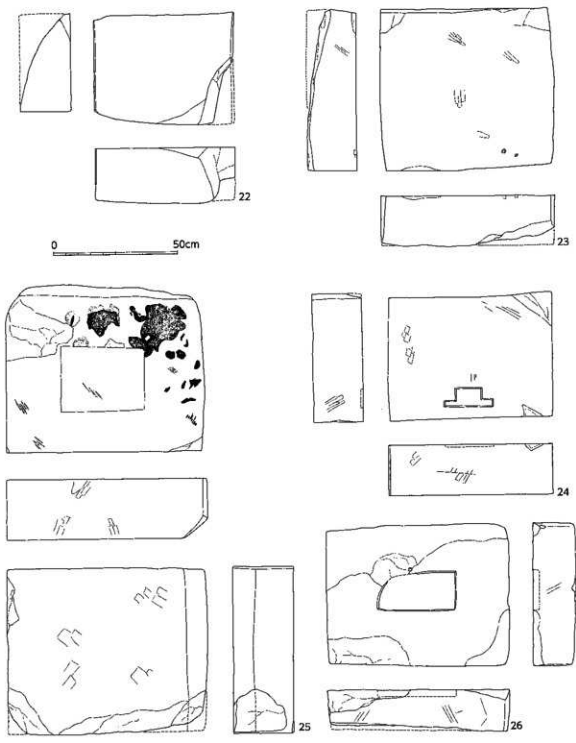
第 30 图 大久保遺跡近世墓碑② (1/15)



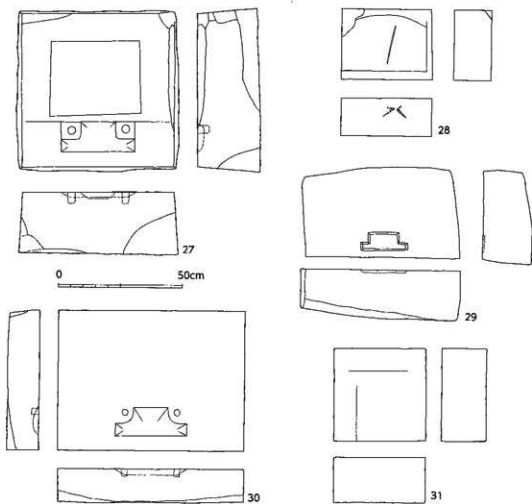
第31圖 大久保遺跡近世墓碑③(1/15)



第32图 大久保遺跡近世墓碑④(1/15)



第 33 圖 大久保遺跡近世墓碑⑤ (1/15)



第 34 图 大久保遺跡近世墓碑⑥ (1/15)

第12表 ハカノ下遺跡墓碑一覧①

番号	図版番号	石材	碑面	銘文	紀年号	西暦	備考
1	35-1	花崗岩	正面	□□□□ □□□□□□吳位 七月廿三日			拓本不採拓。刻銘がみえるが、判読が困難。穂の背面は粗い。
2	35-2	砂岩 花崗岩 凝灰岩	正面	享保十乙巳天 毎真秋月妙用信女吳位 七月九日	享保10年	1725	下の基礎が凝灰岩、上の基礎が花崗岩、穂が砂岩である。穂の背面は粗い。拓本不採拓。
3	35-3	凝灰岩	正面	宝曆四戌天 坂元安安支牧信十 四月九日	宝曆4年	1754	鉛鉛に墨を入れる。穂の下部に墨書による蓮華座を描いている。穂の背面は粗い。拓本不採拓。
4	35-4	花崗岩	正面	宝永四亥年 樽真清泉砂□ 信女靈 六月□日	宝永4年	1707	穂の背面は粗い。拓本不採拓。
5	35-5	花崗岩	正面	宝永六己丑 物故水源了□ 信士吳位 二月廿六日	宝永6年	1709	穂の背面は粗い。拓本不採拓。
6	35-6	花崗岩	正面	宝永三丙戌年 物故□□□ 信上吳位 九月七日	宝永3年	1706	穂の背面は粗い。拓本不採拓。
7	35-7	凝灰岩	正面	□曆九巳卯 毎□□□空 □□□□	宝曆9年	1759	穂の背面は粗い調整。
8	35-8	凝灰岩	正面	寛保四□□天 空 舞空殿外懸春信女 二月二十七日 位	寛保4年	1744	穂の背面は粗い調整。穂の下部に線刻による蓮華座を描いている。
9	35-9	凝灰岩	正面	□享保十四己酉年 歸元 元海童子 幽靈 八月五日	享保14年	1729	穂の背面は粗い調整。穂の下部に線刻による蓮華座を描いている。
10	36-10	凝灰岩	正面	享保十六亥年 吳 歸寂 正麗□貞信女 八月廿□日 位	享保16年	1731	穂の背面は粗い調整。穂の下部に線刻による樹木模様を描いている。
11	36-11	凝灰岩	正面	延享三丙寅年 □元將道宗然信十吳位 二月二日	延享3年	1746	穂の背面は粗い調整。穂の下部に線刻による蓮華座を描いている。
12	36-12	凝灰岩	正面				銘文は判読不能。成形・調整とも雑である。
13	36-13	凝灰岩	正面				穂のみ。墨書銘がみえるが、判読不能。成形・調整とも雑である。
14	36-14	凝灰岩	正面				墨書銘がみえるが、判読不能。成形・調整とも雑である。
15	36-15	凝灰岩	正面	安永八年亥 法山自參禪者 十二月廿五日	安永8年	1711	成形・調整とも雑である。
16	36-16	砂岩	正面	延享四卯 彌岩宗徳信士 七月十日	延享4年	1747	穂の背面は粗い。
17	36-17	砂岩 花崗岩	正面	正徳四甲午歲 舞真秀岳宗美信士之靈 七月十七日	正徳4年	1714	下の基礎が花崗岩、穂が砂岩である。穂の背面は粗い。穂の下部に蓮華文を彫刻している。
18	36-18	砂岩	正面	享保廿一辰天 歸元妙普信女吳 正月七日	享保21年	1736	穂の背面は粗い調整。
19	36-19	砂岩	正面	元文三午天 歸元玄翁宗心信上吳 十月廿一日	元文3年	1738	穂の背面は粗い調整。穂のみ。
20	36-20	凝灰岩	正面	安永二巳年 一寛□□□吳 三月□日	安永2年	1773	穂の背面は粗い調整。
21	37-21	花崗岩	正面	元禄二己巳天 靈 歸元秋雲宗白禪定門 八月朔日 位	元禄2年	1689	穂の背面は粗い。穂の下部に蓮華文を彫刻している。

※番号は、第9図の墓碑番号と同じ

第13表 ハカノド遺跡墓碑一覧②

番号	図版番号	石材	碑面	銘文	紀年銘	西暦	備考
22	37-22	砂岩 花崗岩	正面	延宝三乙卯 早返露心童子美位 九月十五日	延宝3年	1675	下の基礎が花崗岩、礎が砂岩である。礎の背面は粗い。
23	37-23	花崗岩	正面	□□□□天 兼 輝元宗□神定門 九月廿□日 位			礎の背面は粗い。礎の下部に蓮華文を彫刻している。
24	37-24	砂岩 花崗岩	正面	享保六年辛丑天 輝良法堂慈澤信女 兼位 三月八日	享保6年	1721	下の基礎が花崗岩、礎が砂岩である。礎の背面は粗い。礎の下部に蓮華文を彫刻している。
25	37-25	砂岩 花崗岩	正面	享保九年甲辰天 □□義春信士兼位 □□初一日	享保9年	1724	下の基礎が花崗岩、礎が砂岩である。礎の背面は粗い。礎の下部に蓮華文を彫刻している。上半部が欠損。
26	37-26	砂岩 花崗岩	正面	延享四年丁卯年 物故法堂宜藤供士兼 八月十五日	延享4年	1747	下の基礎が花崗岩、礎が砂岩である。礎の背面は粗い。礎の下部に蓮華文を彫刻している。
27	37-27	凝灰岩	正面	□□□□□ 兼 □□□□信女 □□□□			成形・調整とも雑である。銘文は正面が磨滅して判読不能。
28	37-28	凝灰岩	正面	正徳二丁酉年 早供了移重女 兼位 三月廿七日	正徳2年	1712	銘文にみえる元号と干支が異なる。礎の下部に蓮華文を彫刻している。礎の背面は粗い。
29	38-29	花崗岩	正面	宝永二乙午 物故藤藏心僧上 兼位 二月十二日	宝永2年	1705	礎の背面は粗い。
30	38-30	凝灰岩	正面	享保十四巳酉 飯元 一孝宗玄僧上 兼位 十一月十二日	享保14年	1729	礎の背面は粗い。
31	38-31	砂岩 花崗岩	正面	享保十六辛□ 飯真美山妙天信女美 六月二日	享保16年	1731	下の基礎が花崗岩、礎が砂岩である。礎の背面は粗い。
32	38-32	凝灰岩	正面	享保十六辛寅 兼 飯一淨雲相澤信士 八月八日 位	享保16年	1731	礎の背面は粗い。礎の下部に樹木模様を彫刻している。
33	38-33	凝灰岩	正面	享保二戊 輝宅勢信信女 四月九日	享保2年	1717	礎の背面は粗い。
34	38-34	凝灰岩	正面	明和六己丑天 明道玄教信士 七月廿五日	明和6年	1769	礎の背面は粗い。礎の下部に銘文とも文様とも受け取れる彫刻がみられる。
35	38-35	凝灰岩	正面	宝暦十二壬午天 貞田壽口信女 七月十日	宝暦12年	1762	成形・調整とも雑である。礎の下部にみられる彫刻の蓮華文もきわめて雑である。
36	38-36	凝灰岩	左面	天保六未天七月七日 源藏兼	天保6年	1823	すべての面を丁寧に仕上げ。基礎2段は本来のものか疑わしい。
			正面	流路宗全僧上 同會 鶴洲高信信女			
			右面	フテ支 天保六未年五月廿三日			
37	39-37	凝灰岩	正面	明和八年丁天 至道貞信信女 四月五日	明和8年	1771	礎の背面のみノミ痕が残る。
38	39-38	凝灰岩	正面	天明三年 帯心玄道信七 卯十二月廿日	天明3年	1783	各面とも成形・調整が丁寧。
39	39-39	花崗岩	正面	延宝三乙卯 物故妙藏輝尼美位 三月廿四日	延宝3年	1675	礎の背面は粗い。

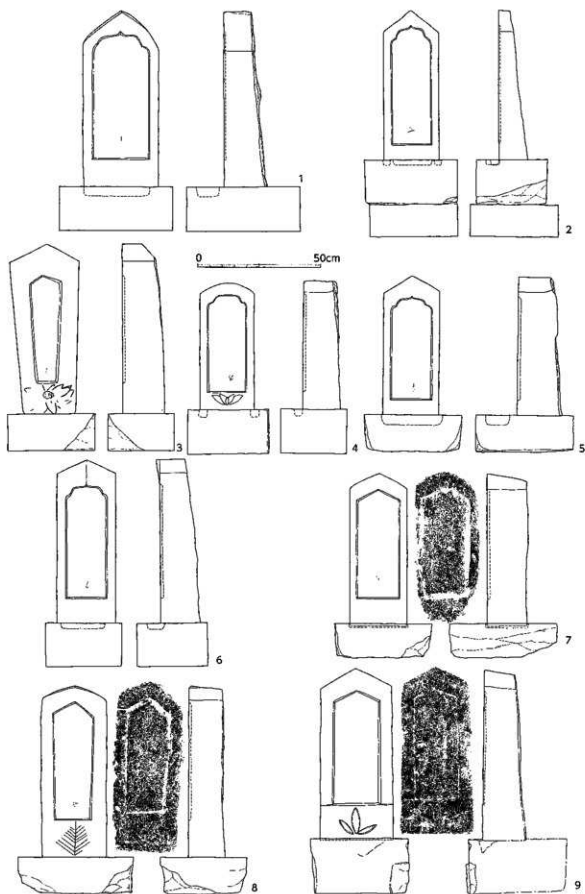
※番号は、第9図の墓碑番号と同じ



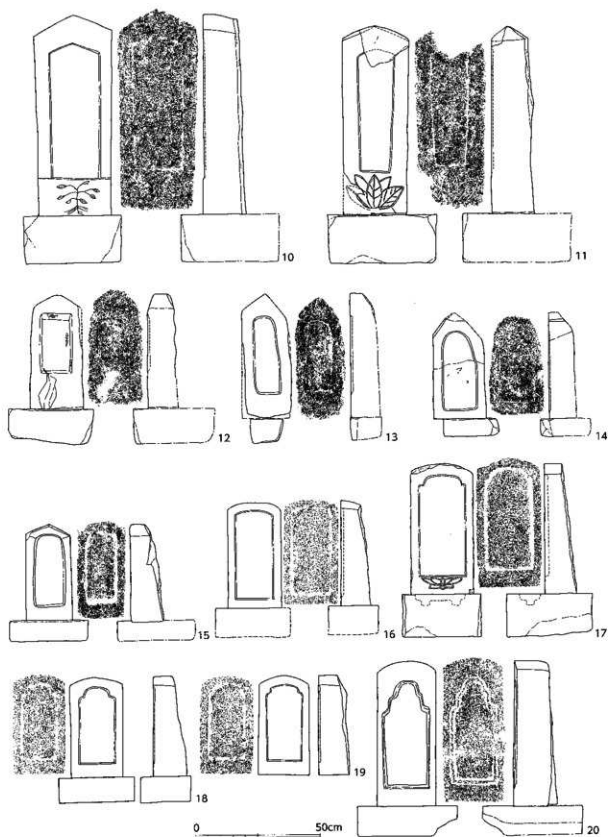
第14表 ハカノ下遺跡墓碑一覧③

番号	図版番号	石材	碑面	銘文	紀年銘	西暦	備考
40	39-40	凝灰岩	正面	□□五□ 御冥□□□二信□ 二月十四日			成形・調整とも粗い。徳の下部にみられる除刻の蓮華文もきわめて雑である。銘文の彫りも雑で浅い。
41	39-41	砂岩 凝灰岩	正面	天明四甲辰 見法女性信士 四月廿三日	天明4年	1784	下の基礎が凝灰岩、上の基礎と徳が砂岩である。
42	39-42	凝灰岩	正面	享保八卯歳 式 敷坐正雲禪定門 卯十二月廿八日 位	享保8年	1723	成形・調整とも粗い。徳の下部にみられる墨書の変華文もきわめて雑である。銘文の彫りも雑で浅い。
43	39-43		正面	文化八辛未 真風道高信士 正月廿一日	文化8年	1811	成形・調整とも丁寧。背面をやや膨らませる。
44	39-44	凝灰岩	正面	享保□癸 飯貞郊雪信女實 卯十一月四日	享保8年	1723	成形・調整とも粗く、銘文の彫りも雑で浅い。
45	40-45	凝灰岩	正面	享保五子年 妙竹信女 五月十四日	享保5年	1720	成形・調整とも粗い。徳の下部にみられる除刻の蓮華文もきわめて雑である。銘文の彫りも雑で浅い。
46	40-46		正面	二界萬霊塔			
47	40-47	凝灰岩	正面	□□□□ 飯元□峯□□ □十月二日□			成形・調整とも粗い。徳の下部にみられる除刻の変華文もきわめて雑である。銘文の彫りも雑で浅い。
48	40-48	花崗岩	正面	野々河内村 元禄六癸酉 壽造立庚申塔 (15名の父名) 九月十九日 各々敬白	元禄6年	1693	成形・調整とも丁寧。徳の背面の調整は粗く、丸く膨らませる。
49	40-49	凝灰岩	正面	安永八亥六月初七日 那供養庚申塔 願主十六人	安永8年	1779	正面上端に日月を刻み、月輪に赤色顔料を入れている。徳の背面の調整は粗く、丸く膨らませる。
50	40-50	凝灰岩	左面	安永五年	安永5年	1776	正面上端に日月を刻み、赤色顔料を入れている。各面とも丁寧に調整している。
			正面	背面金剛			
			右面	申二月十八日			
51	41-51	凝灰岩	左面	宝暦十二年癸未十一月七日	宝暦13年	1763	正面上端に日月を刻み、正面及び両側面に彫り込めをもち刻銘を入れている。各面とも丁寧に調整している。
			正面	庚申供養塔			
			右面	施主常村十七人講中			
52	41-52	凝灰岩	正面	文化七庚午 藤山静殿信士 三月八日	文化7年	1810	各面とも丁寧に調整。

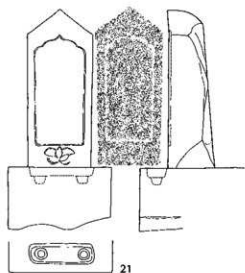
※番号は、第9図の墓碑番号と同じ



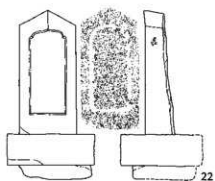
第35図 ハカノ下遺跡近世墓碑① (1/15)



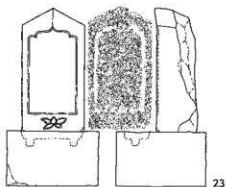
第36図 ハカノ下遺跡近世墓碑② (1/15)



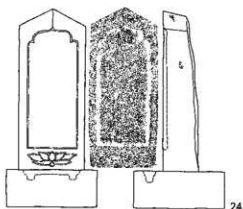
21



22

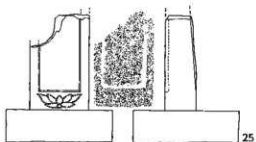


23

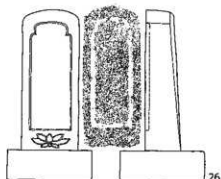


24

0 50cm



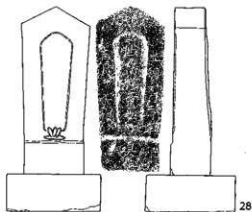
25



26

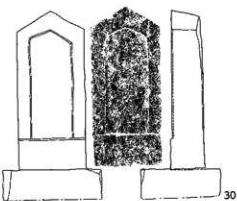
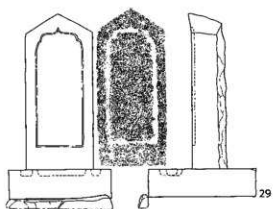


27

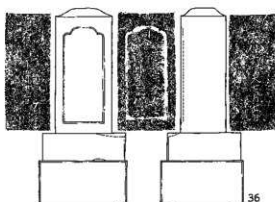
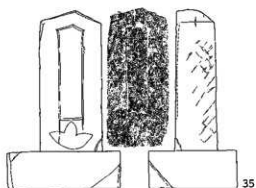
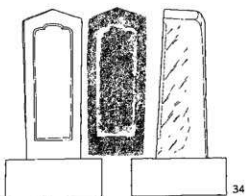
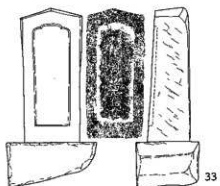
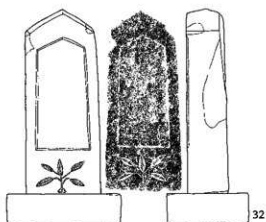
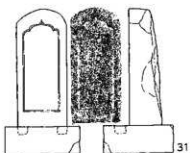


28

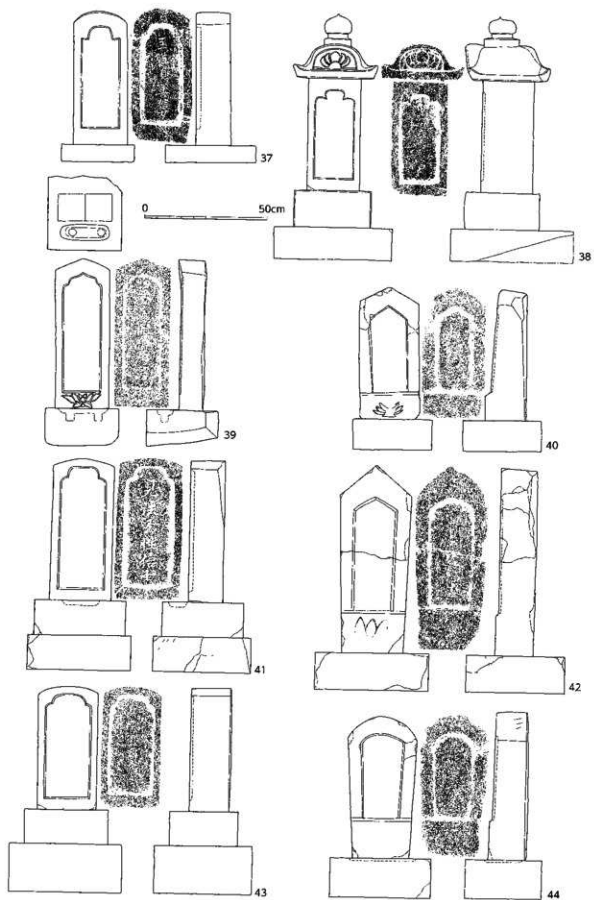
第37图 ハカノ下遺跡近世墓碑③ (1/15)



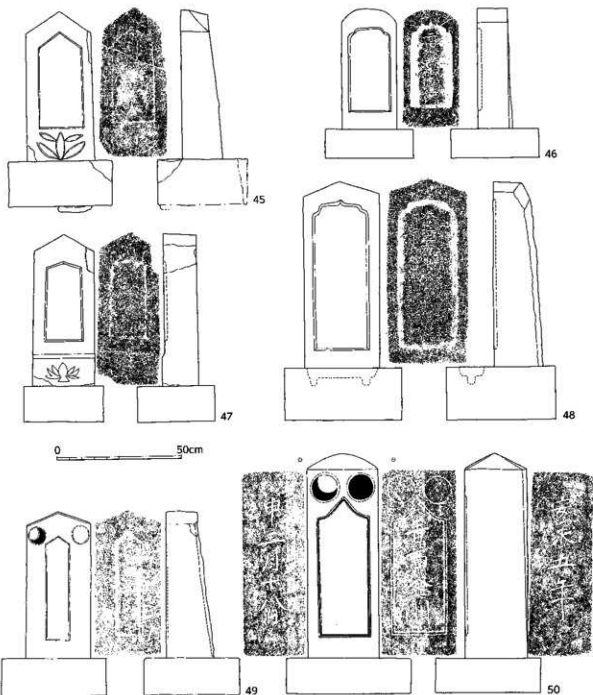
0 50cm



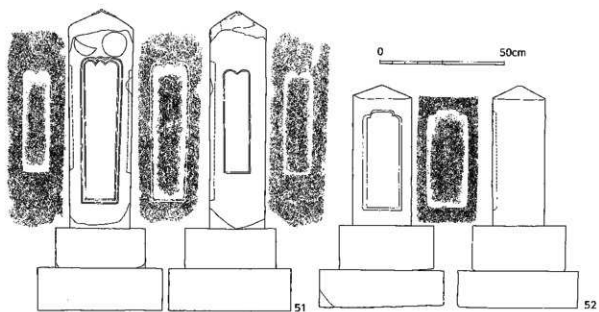
第38回 ハカノ下遺跡近世墓碑④(1/15)



第39图 ハカノ下遺跡近世墓碑⑤ (1/15)



第40図 ハカノ下遺跡近世墓碑⑥ (1/15)



第41図 ハカノ下遺跡近世墓碑②(1/15)



## 第5節 小結

今回、調査対象地となった鶴ヶ池遺跡・大久保遺跡・ハカノ下遺跡は、いずれも狭隘な谷状平野を望む丘陵裾部の集落背後の丘陵緩斜面に位置し、旧景観を良好にとどめる近世墓地である。東九州道建設に伴う移転により、管理者による改葬が前提とされているため、墓地の下部構造の把握が不可能であったが、近世墓地調査が乏しい大分県南部において、墓碑の概要がわかる貴重な成果が得られた。

各墓地とも、中世の石造物はみられず、近世になり成立した墓地であることは共通する。各墓地の周辺には、中世石造物が散見できる箇所もそれぞれにみられるため、中世墓の系譜上にない新たな墓地形成を行なっている点では、各小地域の社会構造を復元する際に、示唆的な成果であるといえよう。

それぞれの最古の墓碑は、鶴ヶ池遺跡が貞享元年（1684）、大久保遺跡が延宝8年（1680）、ハカノ下遺跡が延宝3年（1675）というように、いずれも17世紀後半である。紀年銘が確認できない墓碑も存在するであろうが、型的にみても近似する時期に開創されたことがうかがえる。全国的に寛文年間（1661～1673）に近世墓地が始まりを迎え、この背景に寺檀制度の浸透が存在するが、今回、調査の対象となった地域においても、比較的早い段階から近世墓地が形成されていたことがわかる。

それぞれの墓碑の特徴をみると、鶴ヶ池遺跡・大久保遺跡はすべて凝灰岩製のものである。佐伯市内には凝灰岩が産出し、比較的形態的な個性を有する17世紀後半には、鶴ヶ池遺跡と大久保遺跡の墓碑形態の特徴に大きな違いがあり供給地が異なるものと考えられる。わずか3km程度の距離でありながら、鶴ヶ池遺跡が大越川流域、大久保遺跡が堅田川流域というように谷筋が異なり、これが産出地および流通経路の違いに起因しているのかもしれない。

これに対し、ハカノ下遺跡の墓碑石材は多様である。17世紀代の墓碑は、淡紅色のカリ長石を含む御影石と思われる花崗岩および産地が明らかでない砂岩に限定できる。これは18世紀前半まで続いている。特に注目すべきは、基礎と礎が当初のものでない場合も存在するであろうが、花崗岩の礎と砂岩の基礎との組合せが非常に多く、このセットが当初から存在していた可能性も否定できない。砂岩の産出地として全国的に和泉砂岩が有名であり、また、遠隔地に搬出されている。御影石とともに和泉砂岩も関西地方から搬入された可能性が高いものと思えるが、砂岩自体、大分県南部や宮崎県南部などでも産出され、今後、ハカノ下遺跡の墓碑に使用された砂岩の産地同定が待たれる。いずれにせよ、鶴ヶ池遺跡・大久保遺跡などの内陸部の墓地と異なり、蒲江の浦に存在する墓地の墓碑が遠隔地からもたらされた墓碑に始まることは当地の墓制を特徴付けるものであろう。

このように花崗岩・砂岩に限定された墓碑も、18世紀前半を境に凝灰岩製墓碑に移行していく。享保2年（1717）銘の墓碑を嚆矢とし、その比率を徐々に高めていき、18世紀中葉には、ほぼ、凝灰岩製に限定されてしまう。凝灰岩製墓碑が蒲江において製作されたものとは考えられず、鶴見半島を迂回し、佐伯湾沿岸から搬入された可能性が高い。

このように、佐伯市内であっても各墓地の地勢により墓碑の様相は異なり、今後、調査の類例が増加することにより、さらに詳細な実態が明らかになっていくであろう。

## 第5章 まとめ

佐伯市蒲江から旧佐伯市へぬけるルートは、急峻な山役が続き、平野も乏しい。そのため、可耕地も少なく、集落規模も小さい。今回の調査では、長谷山跡遺跡において南北朝期の宝塔あるいは宝篋印塔の相輪をはじめ、戦国期の石塔部材がみられ、中世期から人間の足跡が認められる。しかし、中世の石塔群はきわめて少なく、また、集落跡も周辺では佐伯市森の木遺跡においてわずかに認められるのみである。中世だけでなく、それを遡る各時代の遺跡も少なく、いかに生活の場として過酷な地域であったことがうかがえる。現代に続く集落は、近世以降、継承されているものが多く、それは近世墓地の存在に裏付けられる。近世に限らず、墓制は社会を反映しているものであり、今回調査を行なった各遺跡の成果をはじめ、今後、新たな調査成果が積み重ねられることにより、地域の社会が復元されていくことになろう。

一般的に近世墓地は累代墓化され、旧景観を失っていくことが多い。幸い、今回、旧来の景観を保つ墓地が東九州自動車道の開発により失われはしたが、全くの空白地であった県南部において近世社会を復元しうる資料となる調査成果が得られた意義は大きい。